

博士学位一覽

学位記番号	人博第 420 号	氏名	<small>フ ァ コ ニ エ ブ リ ス</small> Fauconnier Brice
学位授与の日付	平成 20 年 5 月 23 日		
専攻・指導教官名	共生文明学専攻 稲垣直樹		
論文題目	Le processus de formation de «l'espace discursif marxiste»: autour de Yamakawa Hitoshi, Fukumoto Kazuo et Tosaka Jun (「マルクス主義的言説空間」の形成過程——山川均, 福本和夫, 戸坂潤をめぐって)		
調査委員	〔主査〕稲垣直樹 〔副査〕松田 清, 多賀 茂, 森本淳生 (一橋大学)		

論文要旨

本論文は 1920 年代の日本を中心に、マルクス主義的傾向の理論と当時の政治的課題が絡み合う中で作られていった言説空間の形成過程を論じる。ここでは山川均および福本和夫の政治的・論理的転向、マルクスの概念における「理論的移動」の定義とそれらに対する戸坂潤の立場の比較を行なう。

当時の主要な歴史的・思想的規範、立場は三つあり、それぞれ日本マルクス主義者、コミンテルン、権力の中枢にいた政治家に代表されるが、第一章ではそれら三つの立場に反発を惹き起こしつつも大きな影響を及ぼしたマルクスの理論的批判基準とその変化及び政治的帰結を示す。マルクス自身の「理論的移動」、その後のマルクス解釈とソ連邦による正統化を念頭におきつつ日本のマルクス主義者が作った翻訳的操作の分析を通して、山川、福本、戸坂それぞれによる日本批判の規範形成、その変化と困難を明らかにする。

第二章はその規範の検討を行なう。まず、山川の「方向転換」を中心にして、彼のジャーナリストティックかつ政治的な柔軟性とその天皇制批判の弱点を論じる。次に、福本の論理的展開が与えた衝撃を歴史的に説明した上で、マルクスの範疇を使用するあらゆる思想家への彼の批判の特徴を明らかにする。両者ともレーニンとマルクスを批判基準として利用したので、マルクス主義的言説空間からの離脱としての転向はしなかったといえるが、前者は理論を実践化する一方で理論の一貫性を揺るがし、後者は意識過程の万能的操作のおかげで、理論の論理的体系を守り確実に理論の純粹化を行う一方、現実と離れていった。

第三章では、戸坂が「空間」の概念の分析において幾何学的座標と哲学的範疇との関係を検討し、その後「性格」の概念のイデオロギー批判への役割を定義し、マルクスに基づきつつもその理論の純粹化を行わずに、当時の日本的言説の批判を続け、さらに実践的な活動を行ったことを論じる。この戸坂の立場は、日本のマルクス主義者の理論的活動と国家主義者の諸表現を同時に脱中心化したと思われる。それ故、彼は日本共産党やコミンテルンに従わずとも独特の「党派性」を守ったといえる。

学 位 番 号	人博第 421 号	氏 名	岸本 ^{きしもと} (山田 ^{やまだ}) 圭子 ^{けいこ}
学位授与の日付	平成 20 年 5 月 23 日		
専攻・指導教官名	相関環境学専攻 市岡 孝朗		
論 文 題 目	Aseasonal and Supra-annual Patterns in Long-term Fluctuations of a Chrysomelid Assemblage in a Southeast Asian Rainforest (東南アジア熱帯雨林におけるハムシ群集の長期個体 数変動様式)		
調 査 委 員	〔主査〕市岡 孝朗 〔副査〕加藤 真, 松井 正文, 酒井 章子 (生態学研究センター)		

論文題目

季節の明瞭な温帯に比べて気象の季節変化が弱い熱帯においても、昆虫の多くが 1 年を周期とする個体数変動を示すことがたびたび報告されてきた。しかし、これらの研究の多くは雨量の季節変化が比較的明瞭な熱帯地域で行われており、こうした研究が強調する昆虫個体群動態の特徴が他の熱帯地域でも見られるのかについてはよく検討されてこなかった。東南アジア熱帯の中心部は 1 年を周期とする気候の季節的な変動が弱い一方で、エルニーニョ南方振動に連動した早魃や一斉開花（林冠構成樹木の群集規模での開花の同調）が年次を超えた間隔で不規則に発生することが知られている。こうした気候の変動と樹木のフェノロジーは、そこに生息する昆虫の餌資源量を左右し、ひいてはその個体群動態や群集構造に影響をもたらすことが予測される。そこで、本研究は、東南アジア熱帯中心部の低地フタバガキ混交林において、甲虫目ハムシ科の多種が示す長期個体数変動様式と、気候や樹木のフェノロジーが個体数変動様式と群集構造に与える影響の解明を目指した。約 6 年分の灯火採集標本をもちいた分析の結果、ハムシ科多種で暦上の季節に連動した季節性の顕著な変動様式を示さないことが明らかになった。一方で、年内の個体数変動より年次間の個体数変動が相対的に大きいことが多種で示され、超年次的に発生する早魃がハムシ多種の変動様式に強く影響していることが示唆された。さらに、群集構成種は早魃前後で著しく変化したことが明らかにされ、予測性の低い頻度で生じる早魃が自然攪乱としてハムシ群集を非平衡状態に保つようにはたらくことが考察された。一方、ハムシ成虫の資源量を左右する一斉開花が多種の個体数変動にはほとんど影響を与えていないことが示唆され、非一斉開花期に多種のハムシ成虫が新葉を食べるといった採餌習性が林冠木の花が枯渇する期間にも個体数が著しく減少しない要因であると考えられた。

学 位 番 号	人博第 422 号	氏 名	関 敬一郎
学位授与の日付	平成 20 年 5 月 23 日		
専攻・指導教官名	人間・環境学専攻 東郷雄二		
論 文 題 目	英語の中間構文形成と動詞クラス：二重イベント構造の観点から		
調 査 委 員	〔主査〕東郷雄二 〔副査〕山梨正明, 河崎 靖		

論文要旨

本稿は、語彙意味論の立場から語彙概念構造 (Lexical Conceptual Structure, LCS) を用いて、英語の中間構文形成をその動詞クラスの観点から考察し、中間構文形成メカニズムの一端を明らかにしようとするものである。そして、英語の中間構文形成は LCS レベルで他動詞の外項を上位イベントで置換する二重イベント化の操作と、上位イベント内のイベント項を全称量化する操作の 2 つの操作から形成される事を主張する。本稿の提案により、英語の中間構文が他動詞から形成される事、その述部が主語に対する属性解釈を持つ事、英語の中間構文形成動詞の多くが能格動詞である事が統一的に説明される。

まず、本稿はより精密に中間構文形成の動詞クラスを規定するために、述部のアスペクト構造に基づく動詞分類と、基本的意味要素に基づく動詞分類を両立させるような記述装置が必要であり、これを可能にするものが LCS であると考え、採用する。次に、従来、英語の中間構文は被作用性の制約に従うとされてきたが、本稿の LCS 分析により、この制約で判断できない状態変化動詞クラスとして、degree achievement 動詞クラス、動作主動詞クラス、位置変化動詞クラスが存在する事を示し、いずれも本稿の提案する二重イベント条件を充たす事を述べ、本稿の提案がより一般的な中間構文形成条件である事を主張する。

続いて、同様に被作用性の制約では捉える事ができない心理動詞や知的行為動詞の中間構文形成も、本稿の提案を充たす事を述べる。そして本稿の分析を通じて、中間構文を形成する動詞クラスにおいて、状態変化動詞クラスは物理的対象の状態変化を、心理動詞クラスは認識主体の心理的变化を、そして知的行為動詞クラスは、主体の対象認識を媒介する心的実体の状態変化を表わす事が提案される。この事から英語の中間構文形成動詞は主体－対象－心的実体のいずれかの変化を表すという点で、状態変化動詞であると結論付けられた。

学 位 番 号	人博第 423 号	氏 名	関根真保
学位授与の日付	平成 20 年 5 月 23 日		
専攻・指導教官名	文化・地域環境学専攻	ヨリッセン,	エンゲルベルト
論 文 題 目	戦時上海における日本のユダヤ人管理システム —— 1943 年 5 月 18 日設置の「上海ゲッター」をめぐる一考察 ——		
調 査 委 員	〔主査〕江田憲治 〔副査〕川島昭夫, 辻 正博, 西脇常記 (同志社大学文学部)		

論文要旨

第二次世界大戦期の上海は、ナチスの迫害から逃れてきたユダヤ人の一大避難地となったが（その数は二万人以上に上った）、本稿の主題は彼らユダヤ人の上海離散史に向けられている。その中でも注目されてきたのが、1943 年 5 月 18 日に日本軍が共同租界北東部の楊樹浦地区に設置した「上海ゲッター」である。これはユダヤ避難民の移動と営業の自由を奪い、彼らの生活と運命を翻弄することとなった。本稿の主要な目的は、当時ユダヤ避難民の管理任務を負った「上海無国籍避難民処理事務所」の活動を詳細に考察することによって、「上海ゲッター」の以下の二点を明らかにすることである。

- 1) 日本軍はなぜユダヤ人居住区「上海ゲッター」を設けたのか。
- 2) どのようなユダヤ人管理システムによって、「上海ゲッター」は運営されたのか。

本稿は以下の構成をとる。まず、個人史あるいは家族史的観点から、概説として上海のユダヤ人グループの境遇の相違を明らかにした（第一章、第二章）。第三章以降は日本の政策史という観点から、最初に「上海ゲッター」設置までに、日本の政府や軍、「ユダヤ問題専門家」はどのようなユダヤ人対策をとってきたのかを論じた（第三章）。次に「上海ゲッター」が設置されるまでの経緯を説明し、ゲッターの設置原因として従来考えられてきた「ナチスの圧力」論や「日本のユダヤ人監視」論を紹介すると同時に、新たな見地として「敵国人集団生活所」（米国人や英国人を対象とする収容施設）と「上海ゲッター」の強い関連性を強調することで「敵国人に対する上海治安対策」の可能性を指摘した（第四章）。

最後に、第五章、第六章、第七章において、「上海無国籍避難民処理事務所」の具体的な活動からユダヤ人管理システムの実態を把握し、これに基づいて「上海ゲッター」設置原因の追究に立ち戻ることにした。それぞれ、第五章ではユダヤ人のゲッターの出入りを制限した「パスシステム」、第六章ではゲッター内の相互監視を担った、ユダヤ人自警団の「フォーリン・パオ・チャ」、第七章では「上海ゲッター」への移住を免れたロシア系ユダヤ人の援助組織「サクラ SACRA」を検証し、それらはいずれも日本の厳格なユダヤ人管理体制に利用されたことが判明した。また、このユダヤ人管理システムの特徴を踏まえ、「上海ゲッター」の設置原因は上海の治安対策の一環として行われたとの結論を得た。

学 位 番 号	人博第 424 号	氏 名	陳 ^{チン} 捷 ^{ショウ}
学位授与の日付	平成 20 年 5 月 23 日		
専攻・指導教官名	共生文明学専攻 阿 辻 哲 次		
論 文 題 目	甲骨文字に見える商代信仰の研究 —— 神権, 王権と文化の交わり ——		
調 査 委 員	〔主査〕阿 辻 哲 次 〔副査〕赤松紀彦, 道坂昭廣, 辻 正 博		

論文要旨

本論文は、甲骨文字を分析することによって、商代の信仰を中國文化史の中に位置づけて、その特質を究明するものである。神権・王権と文化の相互関係を中心として、これまでの研究成果を踏まえて、次の二つの領域で新しい研究と独自の構想を提出した。

第一部では甲骨の意義について、主に神権と文化との関係に注目して、商代信仰の具象性と抽象性に留意しつつ、甲骨の諸相を総合的に考察し、その特質を探究する。

商代では最終的な意思決定に關與できる王・卿士・庶人・卜・筮の五者のうち、神意を代表する卜と筮は圧倒的の權威を持っていた。商代の信仰世界において、この卜と筮には、いずれも甲骨が深く関わっている。本論文は第一章で『尚書』洪範などの文獻を再検討して、第二章では卜の時間・場所や方法などの面から卜の特徴について考察し、第三章では筮の確認・『歸藏』の虚實や巫咸の役割について筮の記録を探究した。

第四章で卜と筮の関係について、共通点と相違点を纏めてみた。そして第五章で卜と筮の源流について、近年の考古發掘の成果を取り入れながら探ってみた。甲骨が卜占道具としてではなく、書寫材料として直接關係しない筮の記録にも用いられたのは、卜と筮が商代の信仰を共に支えていたからである。形象を表す卜が數字を示す筮より重視されるとはいえ、互いに補完しながら併用されている。商代の信仰では、物事を卜兆によって捉える具象性と、世界を數理によって捉える抽象性が甲骨に示されている。中國文明における具象性と抽象性が甲骨そのものに内包されることは注目すべきである。

第二部では、商王の豫言録として固辭を取り上げ、主に神権と王権との関係に注目して、五期分類法を用いて、固辭の變遷を中心に商王の權威とその變化について検討してみたものである。

まず第六章で「固・𠄎」字について百餘の字形を全面的に整理して、中間状態を見出し、固—𠄎—𠄎(以上第一期)—𠄎(第二期の假借字)—𠄎(第四期)—𠄎(第五期)という歴史的展開を明らかにした。「固・𠄎」は、卜兆を視て吉凶を判断する意であり、「𠄎」や「𠄎」と同一の文字で、「稽」はその假借字であって、「𠄎」の「𠄎」は「口」に由來すると分析し、義・形・音を解明した。

續いて第七章で固辭全般を時期毎に分類・分析し、その性格と變遷を通時的に考察した。全盛期の第一期や泡沫期の第五期の固辭は沈滞期の第二—四期より圧倒的に多いほか、第一期の固辭は詳細かつ具體的で多様性を備えているが、第二期から固辭の激減と共に簡略化・抽象化や單一化の傾向が現れて、第五期になって数だけは回復したが、具體性が殆どなく公式化が最大の特徴となった。

そして第八章で固辭の變遷と商王權威の變容とを結び付けて探究してみた。司祭長・巫祝長・政治指導者の三つの役割が商王權力の基盤となることを論じ、とりわけ巫祝長としての性格を解析し、神権政治における歴代商王の實像を多角的に把握することを試みた。商王は時代が降ると共に王権が増大してゆくのに伴って、巫祝長としての能力や意識が次第に失われ、獨裁的君主として政治を執り行うようになったことを解明した。

本論文は神権・王権と文化の相互関係を中心として、甲骨文字に見える商代の信仰について総合的に考察して、その特質の究明を試みたものである。

学 位 番 号	人博第 425 号	氏 名	李 在 鎬
学位授与の日付	平成 20 年 7 月 23 日		
専攻・指導教官名	人間・環境学専攻 山梨 正 明		
論 文 題 目	用法基盤モデルに基づく日本語の構文研究		
調 査 委 員	〔主査〕山梨 正 明 〔副査〕服部 文 昭, 大木 充		

論文要旨

本研究は、認知言語学的構文研究の観点から日本語の構文分析を行う。主として文単位の言語現象を扱い、使用の「動機づけ (motivation)」の問題を中心に考察する。理論的視点としては、用法基盤モデルの観点から記述説明を試みる。

本研究は、三つのまとまりから構成されている。一つ目は、第 2 章と第 3 章からなる、分析モデルについての考察である。二つ目は、第 4 章から第 7 章までからなる、言語現象の具体的な分析である。最後に、第 8 章からなる、構文の再定式化に関する理論的考察である。

分析モデルの考察として第 2 章では、認知文法と構文文法の言語観・文法観を概略的に述べる。そして認知文法のサブモデルとして、用法基盤モデルの誕生から現状に至るまでの研究状況について述べる。具体的には、用法基盤モデルが言語の使用態に対するもっとも実質的なモデルの一つであることを示した上で、頻度効果をめぐる問題についても部分的に触れ、コーパスベースの分析と用法基盤モデルの関係について考察する。第 3 章では、本研究における構文の位置づけをめぐる問題を考察する。

次に、実際の言語現象の具体的な分析として、第 4 章では、「X が Y = V する」形式の問題として、「消える」の事例分析を通し、問題の所在を明確にする。そして、この問題は「消える」のみならず、日本語の様々な部分において観察される一般的現象であることを示す。主として様々な共起テストを用いて、構文現象を特徴づけると同時に、先行研究の記述的妥当性を検討する。第 5 章では、アンケート調査に基づく考察を行う。結論として、母語話者の文意に対するカテゴリー化は動詞の相違からは予測できないことを示す。そして、第 6 章では第 5 章で明らかになった事実を過去の研究に照らし合わせて、どのような問題があるのかを明示化する。具体的には格パターンや動詞による一般化の本質的な限界と矛盾を指摘する。そして、第 7 章では、第 6 章までで明らかになった事実をコーパスデータを用いて、総合的に検討する。結論的には、日本語の構文現象が、名詞の意味クラスの相違によって体系的にカテゴリー化されているという事実を報告する。最後に、構文の再定式化に関する理論的考察として、第 8 章では、第 5 章や第 7 章の事実を認知言語学的構文研究の枠組みにおいてどのように位置づけるべきかという問題、さらには、どのような理論的態度をとるべきかという問題について考察する。結論的には、従来の「形式」と「意味」の一対一の単純化された対応から、「表現パターン」と「認知事態」の双方向的対応から精緻化していく必要があることを示す。

学位番号	人博第 426 号	氏名	上野正恵 <small>うえのまさえ</small>
学位授与の日付	平成 20 年 7 月 23 日		
専攻・指導教官名	環境相関研究専攻 間宮陽介		
論文題目	ウィルダネス概念とフィリア仮説に基づく環境リテラシー		
調査委員	〔主査〕間宮陽介 〔副査〕浅野耕太, 西井正弘		

論文要旨

この論は、環境問題における教育のあり方、および自然と人間のあり方についての考察である。環境教育は環境の諸問題への創造的コミットメントを目指し、個々の行動をその内的必然性に基づき発生させることを期している。「人間の幸福にとって自然は何であるのか」という視点から問題を再検討するに際し、幸福が主観的経験からなる感覚を基礎としたものであるとみなして、この本能からのアプローチを幸福を図る手段とする。「自然、特に原生自然は、我々の身体的、経済的、精神的幸福にとって必要不可欠である」という作業仮説の下、自然と創造性との関係を論じる。

人間の創造的精神を介した自然の取り込みは個人や社会の意識および精神の目となり、あらゆる点で人間性の陶冶を可能にする。この創造的精神を最大限に鍛えるものが原生自然の「ウィルダネスソリチュード」という様態である。それは創造の源との直接的交信であり、芸術家たちには精神を直に掴むことの出来る状況であって、我々にとっては人間性探究の機会である。

創造的精神の発揮は、イメージ・フィリアやバイオフィリアとして人間がその進化のプロセスで獲得し本能として有する能力である。ゆえに本来、人間にとって望ましい幸福を約束し、また芸術療法のよう存在を保証するものである。さらに自然の仕方に基づく個人そして社会の自己実現を可能にする。創造性を媒介として自然が「形」において一人を完全に、そして人々を一つに結ぶその方法は、多様で積極性を伴いつつも全体的調和を帯びた表現として道徳性をもたらし、それは行動に於いて自己矛盾を示さない。「芸術による教育」によって、環境リテラシーは強要されたものではなく個人において自ずから表現されるものとなろう。そして社会における価値基盤が自然由来のものとなった今、経済のあり方も変容してくるに違いない。その源となる原生自然は、急を要する諸問題と同様、第一義的にありのままの状態で保存されなければならない。

我々の感情的効用を根拠とする自然および環境対策の強靱さは、それが文化を超える力を持ち、万人の幸福に帰することにある。そしてこの自然に端を発する道徳性の遍在、つまり我々の自然の獲得は、人間の希求であり人間性そのものを支えるものである。

学 位 番 号	人博第 427 号	氏 名	たま い なお ひこ 玉 井 尚 彦
学位授与の日付	平成 20 年 9 月 24 日		
専攻・指導教官名	人間・環境学専攻 大木 充		
論 文 題 目	The Syntax-Semantics Interface of Change-of-State and Change-of-Location Expressions : From a Derivational Viewpoint (状態変化・位置変化表現の統語・意味インターフェ イス —— 派生的観点から ——)		
調 査 委 員	〔主査〕大木 充 〔副査〕山梨正明, 藤田耕司		

論文要旨

本論文では、状態・位置変化を表す **V-DP-AP/PP** 型構文、特に結果構文・場所格交替構文・使役移動構文の統語派生に関わるアスペクト特性に焦点を当て、「動詞の項選択が、各動詞によらず共通の統語的要因からどの程度まで予測可能か」を考察する。レキシコンに記載される部分を最小限に抑える立場から理論的かつ経験的に妥当な説明を試み、特に次の (I)–(III) の 3 点を主張する。

(I) **V-AP-DP** 語順の結果構文 (例: **push open the door**) は **V-DP-AP** 語順と統語派生が異なる。この主張により、[**V-A**] を複合動詞とみなす語彙的なアプローチの問題点は解決される。特に、**V-AP-DP** 語順における **AP** は、形態は同じでも一般的な状態形容詞とは異なり、Embick (2004) のいう **resultative participle** が例外的に **-ed** 形態素を欠く、という「形態と意味の不一致」の一例である。

(II) 場所格交替の **locative variant** (例: **load hay onto the wagon**) は動詞 **put** と同じ構造を、使役移動構文 (例: **sneeze the tissue off the table**) は小節構造をとる。このとき、英語では両者とも文法的であるのに対してフランス語では後者は非文法的である、という通言語差は、様態要素は語根 (**root**) として統語派生内に併合 (**merge**) すると考えることで説明できる。フランス語で使役移動構文が非文法的なのは、音形ゼロの主要部が語根よりも先に統語派生内に併合した上で **V-to-T** 移動が顕在的に起こる結果、形態論的制約に抵触するためである。

(III) 本来完了を含意するとされる結果構文などが継続相の副詞句 (例: **for an hour**) と共起する例は、複合述語構造を仮定せずに完了性 (**telicity**) を機能範疇 **Asp** の素性照合と捉えることで適切に説明できる。このとき、目的語名詞句が非有界である場合 (例: **paint walls red**) や、結果述語が変化の終点を表さない場合 (例: **hammer the metal nearly flat**) をも含めた統一的説明が可能となる。

学位番号	人博第428号	氏名	小池郁子
学位授与の日付	平成20年11月25日		
専攻・指導教官名	文化・地域環境学専攻 田中雅一		
論文題目	西アフリカ，ヨルバの神々をもとめて —— アフリカ系アメリカ人のオリシャ崇拝運動 ——		
調査委員	〔主査〕田中雅一 〔副査〕菅原和孝， 松田素二（文）		
専門委員	古川博巳（元天理大学教授）		

論文要旨

本論文の目的は、アメリカ合衆国社会で「黒人」とよばれるアフリカ系アメリカ人が黒人らしさを実践する意義について考察することである。黒人らしさの実践は、白人・キリスト教文化からの抑圧にたいする抵抗とみなす立場が優勢を占めるが、こうした先行研究には3つの問題点がある。まず、アフリカ系アメリカ人を抵抗する存在ととらえることで、そこから逸脱するような人々や行為を無視したり、矮小化したりしてしまうことである。つぎに、抵抗を政治的実践と同一視することで、アフリカ系アメリカ人のゆたかな生活実践の動態を無視する、あるいはその一部のみ注目するという傾向が問題である。さいごに、黒人運動と密接に結びついているアフリカとの関係についても十分な議論ができていないことが指摘できる。そこで本論文では、こうした問題点を克服することを念頭に、黒人たちの運動を考察する。

本論文の研究対象はアフリカ系アメリカ人のオリシャ崇拝運動である。この運動は、1969年に米国南東部のサウスカロライナ州にオヨトゥンジ村とよばれる集合的崇拝拠点を創設し、ナイジェリア、ヨルバランド起源のオリシャ神を崇拝している。

本論文は序論・本論・結論の9章から構成されている。本論の第2章では、本論文の背景について述べる。その後の本論の議論は大きく3つに分かれる。第3章と第4章では、オリシャ崇拝運動の形成過程とオヨトゥンジ村を中心にした運動についてまとめる。つづく第5章と第6章では、オヨトゥンジ村を離れた成員がフロリダ州に設立したオリシャ崇拝の組織（ハウス）について論じる。さいごの第7章と第8章では、オリシャ崇拝運動とヨルバランドとのつながりについて述べる。

オリシャ崇拝運動は1960年代の組織化の段階で標榜した「反白人・反キリスト教」主義や運動の集合的実践という形態を変化させながら現在もなお展開されてきた。黒人らしさを抵抗とみなす視点に従うなら、この変化はオリシャ崇拝運動の衰退に見えるかもしれないが決してそうではない。オリシャ崇拝者は、ヨルバランドの人々との接触を通じて、黒人らしさを規定する「アフリカ」との関係を定義し直すことで、黒人らしさの内実を変化させた。これによって、黒人らしさの実践とは、もはや抑圧的な白人の支配文化にたいする抵抗ではなく、能動的に実践できる伝統や文化を創り出し、その伝統や文化を共有する社会空間を形成するための共同性を編み出すことになったのである。

学 位 番 号	人博第 429 号	氏 名	高橋 孝 子
学位授与の日付	平成 20 年 11 月 25 日		
専攻・指導教官名	環境相関研究専攻 山田 孝子		
論 文 題 目	サンゴ礁資源利用に関する人類学的研究 —— 沖縄・佐良浜の事例から ——		
調 査 委 員	〔主査〕山田 孝子 〔副査〕菅原 和孝, 田中 雅一, 竹川 大介 (北九州市立大学)		

論文要旨

本論文の目的は、サンゴ礁を生業の場とする人びとがどのように自然資源を利用するのか、資源への直接的なかかわり方と社会経済的な側面から明らかにすることである。本論文は、沖縄・宮古諸島の佐良浜集落でおこなった合計約 1 年半年間の現地調査より得られた資料にもとづいている。とくに、潜水による漁法を営む漁師の漁撈活動や魚売りに関する参与観察より、自然と人間との関係性を詳細に記述・分析し、自然を利用する際に顕在化するさまざまな政治性や社会経済、世界観などを含めた多様な側面について考察した。

本論文は、二部から構成され、全 8 章からなる。第一部では、漁師の自然利用に関する知識やその運用を手がかりに、自然資源利用の実態を明らかにした。具体的には、サンゴ礁地形や潮汐現象、魚の生態などに関する民俗知識について取りあげ、どのように知識を運用しながらサンゴ礁地形を利用するのか、漁撈活動の実態を明らかにした。そして、漁撈集団ごとに営む漁法の組み合わせが異なるため、漁獲対象となる生物や利用する海底地形、漁場となるサンゴ礁が異なることを明らかにした。

第二部では、漁撈活動と社会経済的諸要素との関係性について考察した。ウキジュとよばれる漁師と仲買いの固定した関係による取引慣行をとりあげ、仲買いの生活戦略を分析した。その結果、仲買いと漁師との関係性は必ずしも経済的な価値に還元されず、社会的なモラルの共有によって維持されていることを明らかにした。また、漁師が仲買いの期待に応えようと行動することは、結果的に、特定の水産物に商品価値を集中させず、漁場として利用するサンゴ礁を分散化させていることを明らかにした。そして、漁師の信仰的なおそれに対する語りを取りあげ、おそれが漁場を選択する際の行動選択の一つになっていることを述べた。本論文では、サンゴ礁資源利用の実態を分析することにより、人間と自然との関係性が、物質的な自然への関わり方だけではなく、社会や経済、信仰的側面と分かťことなく絡み合っていることを明らかにした。

学位番号	人博第 430 号	氏名	上 ^{うえ} 本 ^{もと} 雄一郎 ^{ゆういちろう}
学位授与の日付	平成 20 年 11 月 25 日		
専攻・指導教官名	共生人間学専攻 高橋 義人		
論文題目	『霊界物語』に見る大本教の民衆性 —— 出口王仁三郎の近代批判 ——		
調査委員	〔主査〕高橋 義人 〔副査〕ベッカー, カール, 田邊 玲子, 鎌田 東二(こころの未来研究センター)		

論文要旨

本論考は、大本教の聖師・出口王仁三郎（1871-1948）の『霊界物語』（全 81 巻 83 冊）の研究を基礎とし、独自の新たな観点から彼の著述および活動の総体を包括的に究明することで、大本教を特徴付ける民衆性の具体的な考究を試みたものである。

第一章では、『霊界物語』で展開された王仁三郎の「月の神学」を取り上げる。彼は、この物語において月を主題化しスサノヲと結びつける。そこには、国家神道および開祖・出口ナオの権威を超克しようとする思惑のみならず、民俗社会に生きる信仰や伝統的な美意識を重視する彼の一面が窺える点を指摘する。

第二章では、「笑い」という観点から『霊界物語』を取り上げる。笑い笑わせる教祖であった王仁三郎が、生活世界に生きる笑いを重視していたという一面、また「聖なるもの」をたくみに風刺する反骨精神を持ち合わせていた点を示す。

第三章では、『霊界物語』に描き出された「鎮魂」を具体例として、王仁三郎の言霊論が人間の声を重視し臍下丹田を重視するものであったことを示し、「〈霊=術〉系新宗教」という一面的な把握に反駁を試みる。彼の言霊論の帯びる身体性は、「ハラ」を重視する伝統的な身体感覚ともつながるものであることを示す。

第四章では、王仁三郎の変身に注目し、変身を導いた彼の内的な論理を、主神論の解説を通じて明らかにし、彼の変身が一般信徒にとって持ちえた意味について考察する。

第五章では、「おなら」という観点から王仁三郎の著述・作品を取り上げる。具体例の分析を通じて、彼が一大「屁芸術家」であった点を示す。

本論考が明らかにしたいのは、王仁三郎と民衆の生活世界の接点であり、大本教の有する民衆性の具体相である。国家神道を巧妙な仕方で批判していく半面で、国家神道やナオの教説には見られない、民衆にとっての具体的で実感できるものを大本教の運動に取り込んでいった宗教者としての一面が、王仁三郎の内に見出せるのである。

学 位 番 号	人博第 431 号	氏 名	布 施 将 夫
学位授与の日付	平成 21 年 1 月 23 日		
専攻・指導教官名	文化・地域環境学専攻 島田 真 杉		
論 文 題 目	鉄道と軍事から見た合衆国形成史 —— 南北戦争から第一次大戦までを中心に ——		
調 査 委 員	〔主査〕 島田 真 杉 〔副査〕 川島 昭 夫, 前川 玲 子		

論文要旨

本稿では、鉄道と軍事という一見古めかしく、敗戦後の日本では後者がタブー視されたため特に研究が乏しいテーマで、南北戦争から約半世紀間のアメリカ合衆国における近代国家の統合・形成過程を検討した。先行研究が少ないとはいえ、これらの要素がアメリカ社会の最大級の変動要因である以上、これらを手がかりに歴史を検証することこそ、歴史の変化を鋭く捉える上で必要だと考えられる。南北戦争中の北軍には、合衆国軍事鉄道局という鉄道運営機関が戦時立法で新設された。しかし同局が鉄道利用の効率を上げ、その押収の必要を下げたため、終戦時に管理されていたのは全米の鉄道の 6% にすぎなかった。その結果、近代国家として連邦政府が国土に支配を浸透させる可能性まで抑えられたのである。一方、戦前から軍が建設予定地を調査していた大陸横断鉄道の建設構想では、この鉄道が内陸開発や国防、内戦終結に貢献するはずだというような全国的な建設目的が、主に議会で主張され続けた。近代国家として政府が国土に支配を広げる可能性も期待されていたといえよう。19 世紀末まで続いたこのような二面性のうちの前者、つまり不完全な鉄道管理が米西戦争で露呈し問題視されたため、ルート陸軍長官による軍制改革が 20 世紀初頭に始まる。鉄道管理の徹底が目標の一部であるはずの陸軍省参謀部が設けられたものの、省内各部局との抗争が原因でこの目標は結局達成できない。中央官庁内ですら政治的権威が分散した未熟な段階の近代国家の実態が窺える。またそれゆえ、第一次大戦の参戦直後から鉄道産業の統一的な管理を試みられたのは民間の鉄道戦時委員会だけであった。しかし、同委員会の活動も反トラスト法や他省庁の干渉等で妨害されたため、1917 年末には鉄道庁が創設される。マッカドゥー長官の努力で他省庁の干渉を排し、全米の鉄道網を統制した鉄道庁は、行政諸機関の中でも政治的権威を集中し、政府が国土に支配を広げる前提たりえたといえよう。以上の結果本稿では、第一次大戦期アメリカの急激な国家形成過程と、それ以前の約半世紀間にわたる反国家主義的なアメリカ史像の一端を、実証的に提示できたと考える。ただし、アメリカが長く反国家主義的であったからこそ、いわゆる「軍産複合体」が生まれたのではなかろうか。この推定は今後の研究課題としたい。

学 位 番 号	人博第 432 号	氏 名	森 ^{もり} 田 ^た 健 ^{けん} 司 ^じ
学位授与の日付	平成 21 年 1 月 23 日		
専攻・指導教官名	環境相関研究専攻 佐伯啓思		
論 文 題 目	武士道と日本近代思想形成史 ——「公共性」の日欧比較思想研究にむけて		
調 査 委 員	〔主査〕佐伯啓思 〔副査〕西村 稔, 大澤真幸, 笠谷和比古 (国際日本文化研究センター)		

論文要旨

本論考は表題の通り、日本における近代思想形成史との連関の下において、武士道を考察する試みである。すなわち、近代という度量衡を用いて、武士の思想を再考、再解釈する試みであり、逆にいうならば、「近代なる時代／概念／価値」から眺めて、武士の思想が如何なる位置に存するのか、それを究明するものとしても良い。

第一章「近代思想の条件」では、近代の定義付けを簡潔に行った上で、近代思想の探求を、主に西洋社会思想史の業績を振り返りながら行う。ここでは、公共性についての議論にも相当の紙幅が費やされるが、それは近代思想にとって、公共性という概念が大きな意味を有しているがゆえのことである。次の第二章「思想史における『視線』類型」では、まず西洋における近代思想が如何なる手順を経て登場したのかを概観する。続いて、日本思想史における、仏教と儒学の軌跡も辿る。ここで仏教と儒学が考察対象として選択された理由としては、武士道を社会思想的側面から捉えた場合、そこに最も直接的に関わるものが、この二つの教理・哲理であることを挙げておきたい。第三章に据えられた「日本における『公私』」は、主に公という観念を巡る議論を歴史的に行う。また、本章では、江戸時代中期における公私観念を鮮やかに提示した、赤穂事件とその反応を、一つの実例として考察する。これに続く第四章「武士道の再定義」では、主に死生観という側面から、武士道の本質を明らかにし、武士道を近代思想形成史の中に位置付けることを主旨としている。最終章「近代日本と武士道」では、前章までに取り上げた武士道が、近代思想に結実していく最終局面をみる。朱子学を超克した陽明学が、武士道と融合して成立した陽明学武士道と、陽明学の限界を認識し、西洋化の奔流の中で苦闘した横井小楠の思想は、日本の自生的近代思想が誕生する、まさにその瞬間を見せ付けるものとなっている。

学 位 番 号	人博第 433 号	氏 名	稲 田 雅 美 ^{いな だ まさ み}
学位授与の日付	平成 21 年 3 月 23 日		
専攻・指導教官名	人間・環境学専攻 新宮 一成		
論 文 題 目	ミュージックセラピーの実践におけるセラピストのあり方についての研究 —— 精神分析の関係理論を踏まえて ——		
調 査 委 員	〔主査〕新宮 一成 〔副査〕岡田 敬司, 小山 静子		

論文要旨

本論文は、欧米にその理念と実践の発端をもつミュージックセラピーの意義を明らかにし、セラピストの適切な音楽的介入と、その結果としてのクライアントの治癒的反応について、精神分析の関係理論を通して考察したものである。

本論文は二部構成である。第一部では、精神医療領域におけるミュージックセラピーの実践を踏まえ、セラピストの機能が Winnicott および Bion の母子関係理論における母親の機能に対応すること、クライアントによるセラピストの機能の内在化は他者や状況への気づきをもたらし、Winnicott の「遊ぶこと playing」の発動の契機となること、そして、病いの語りとしてのクライアントの音楽表現は、セラピストとの音楽的相互作用を通して「語らい」となり、文化的体験へと変容することについて、4章にわたり議論している。

第二部は、主にシニフィアン概念を適用して音楽と言語構造の関連を解明しつつ、クライアントを「関係性」の世界の中に導き入れるためのセラピストの役割について、2章を立てて追求したものである。音楽の成立において、言語象徴化作用を支える根源的シニフィアンに対応する「根源的律動」の存在を想定し、根源的律動が機能していないクライアントの表現特性を、セラピストはいかに受け止め、質的に変換させてシニフィアンの連鎖に導き入れることができるか、またクライアントはそのシニフィアンの漂いの中で、自己治癒の契機となり得るところの「機知」をいかに生起させていくか、について議論している。以上の考察により、セラピストの「アルファ機能」の発動による万全な立ち位置が、クライアントの病的な表現特性を創造的な表現要素へと変換すること、またクライアントの自己治癒の契機を看過することなく、治療的行為を芸術的営為へと価値転換することを結論としている。

学位番号	人博第 434 号	氏名	佐藤 泰子
学位授与の日付	平成 21 年 3 月 23 日		
専攻・指導教官名	人間・環境学専攻 新宮 一成		
論文題目	終末期患者のスピリチュアルペインへの臨床的アプローチ ——「苦しみの構造」に着目して——		
調査委員	〔主査〕新宮 一成 〔副査〕岡田 敬司, 永田 素彦		

論文要旨

本論の目的は「苦しみ」という人間存在の根源的テーマを取り上げることで、援助の本質を掘むことである。患者や利用者が医療者の言葉に傷つくということがしばしばある。これは援助者の思想、あるいは専門職教育と患者や利用者の思いとの間にずれがあるからではないかと感じる。そこで、援助論の根幹を再考する目的でまず、人が「苦しいとはどういうことなのか」を解明し、さらに死を前にして本来的自己に立ち返っている終末期患者の精神的苦痛にアプローチをする。

「もう、生きていても意味がない」逆に「死にたくない」といった自己の存在を主題とする実存的苦痛を抱えている患者に対して援助者はどうあるべきかという問題は医療において重要な課題である。しかし、実存的苦痛とはどういうものなのか、またそれは昨今スピリチュアルペインとも言われるが、その本意は何なのかといった根本的な命題は不問のままである。

本論は「苦しみ」のなかにある者への援助の方法論を目指すのであるから、まず「苦しみ」とはいったいどのような構造をもっているのかを明らかにしなければならない。さらに、半年間にわたる終末期患者との会話を基に終末期患者のスピリチュアルペインを考察することによって、援助のあり方をより一般的な視点から考察する。

主体は意識の志向性によって対象化されたある事態に対して否定と肯定という対峙的評価を与え、評価はこの対峙のなかを流動するが、否定的事態を生きているときに苦しみがある。スピリチュアルペインは自明を喪失し事態の否定的評価のなかで「自己の存在と意味を問う」苦しみである。ケアは、その「問い」に答えを用意するとか既成概念に導くというものではなく、動かさない事態を生きる人間のセルフコーピングの力によって自らが問いに意味を与えていく道程を支えることであると結論した。そこに介在する行為が「語ること」と「聴くこと」であった。本論は援助者の一助となるべく、苦しみを構造的に理解する枠組みを提供することと患者が語ることの意味を明確にすることによってケア概念を再考するものである。

学位番号	人博第 435 号	氏名	野澤 <small>のざわ</small> 元 <small>はじめ</small>
学位授与の日付	平成 21 年 3 月 23 日		
専攻・指導教官名	人間・環境学専攻 山梨 正明		
論文題目	フレームモデルに基づく言語理解と言語生成の認知的分析		
調査委員	〔主査〕山梨 正明 〔副査〕齋藤 治之, 壇辻 正剛		

論文要旨

本稿では、概念モデルとして階層的フレームモデルを提案する。このモデルでは、概念一般の組織化原理としてフレーム構造を採用し、モデルの設計の制約として神経学的な知見を利用している。また、このモデルを用いた言語表現の意味記述を試み、それを通して、認知科学一般と言語学の統合を目指す。

第 2 章では、階層的フレームモデルについて解説する。意味論一般におけるモデルの位置付けや、言語表現の意味の記述において、モデルが果たす役割について論じる。また、本稿で前提とする、表現の理解と生成についての仮説を提示する。さらに、階層的フレームモデルの設計における原理や、具体的な構造について述べ、いくつかの具体的な意味記述の事例を示す。第 3 章では、意味の主観性と客観性について、階層的フレームモデルと関連付けながら論じ、両者はモデルの異なる領域と対応関係を持つことを主張する。また、表現の意味は、実際には、主観的な要素と客観的な要素から成る複合体であり、そのような要素の配分比率の変化によって、いわゆる主体化のような意味変化が生じることを示す。第 4 章では、感覚と情動に関わる表現を、特に形容詞に焦点を当てて分析する。そして、感覚や情動は、特定の事態の概念構造に埋め込まれて理解されること、また、主体と客体の不適合が生じる表現では、特に事態の概念構造が理解にとっては重要であることを論じる。第 5 章では、行動、行為、スクリプトといった、事態の詳細な階層構造の観点から、動詞や構文の意味を分析する。そして、それぞれの動詞や構文が、事態の異なる階層をその意味として表し、また、そのような分析が動詞のアスペクトについての考え方にも一部応用できることを示す。第 6 章では、構成的な階層構造ではなく、カテゴリー的な階層構造の観点から、フレーム構造がメタファーの理解に重要な役割を果たしていることを論じる。そして、認知言語学において主流なメタファー理論を批判的に検討し、フレームを適応的な認識単位と見なす、行動学的なメタファー論を提唱する。最後に、7 章において、まとめと今後の展望について述べる。

学位番号	人博第 436 号	氏名	中 ^{なか} 島 ^{じま} 暢 ^{のぶ} 美 ^み
学位授与の日付	平成 21 年 3 月 23 日		
専攻・指導教官名	共生人間学専攻 岡田 敬 司		
論文題目	ディブリーフィング・ワークの研究 —— 看護学生の臨地実習におけるディブリーフィング・ワークの心理教育的意義 ——		
調査委員	〔主査〕岡田 敬 司 〔副査〕新宮 一成, 杉 万 俊 夫		

論文要旨

ディブリーフィング・ワークの研究は、臨床心理士が臨床心理士として身についた「意図的態度」によって実践し、成し得る臨床心理学的研究である。

本稿における研究対象は看護学生である。燃えつき症候群等の具体的解決のないまま看護師不足に至っている近年の看護職が抱える問題に対する試みである。

先ず、看護の歴史や社会的背景を概観し、次のような具体策を提出した。第 1 に、精神健康の維持は職場の円滑な人間関係に尽き、職場における相互理解が不可欠であることは教育されねばならない。第 2 に、看護教育について領域外からの支援を受け入れる。第 3 に、心理教育としてのディブリーフィング・ワーク（以下では DW と表記する）の導入である。DW の目的は、第 1 に、職業性ストレスへの予防と対処の習得、第 2 に、自己の治癒と育成である。

次に、トラウマティック・ストレスの概念、燃えつき症候群との関連、そして、ディブリーフィングの定義、歴史的背景、目的や技法について概観した。DW は、臨床心理士が日常的に実践し継続可能な支援の一つになり、看護師の離職に対する具体的施策の一つとして有用であるといった理由から、看護の教育課程への導入の必要性が考えられた。

更に、筆者のディブリーフィングとの出会い、ボランティア援助、被災した障害児の母親らへのリラクゼーションを経て、DW の実践的研究に至る。実践的研究では、教員との協働において、心理測定を併用し試行錯誤を繰り返した。結果として、DW は看護学生にとって有用であることが実証された。また、個々の事例からは、DW の一次的意義として、相互理解、安全感の獲得や自励心と自宥心が支えられ、二次的意義として、自己が再構築される場、共感について再考されるといった有効性が推考された。

学 位 番 号	人博第 437 号	氏 名	三 好 正 彦
学位授与の日付	平成 21 年 3 月 23 日		
専攻・指導教官名	共生人間学専攻 岡田 敬 司		
論 文 題 目	学童保育の多角的研究 —— 児童福祉的側面と人間形成論的側面からの考察		
調 査 委 員	〔主査〕岡田 敬 司 〔副査〕小山 静子, 杉万 俊夫		

論文要旨

1960年代以降、共働きの親たちを中心にした運動によって学童保育は全国に拡大され、現在に至っている。本研究はその学童保育に多角的な視点からアプローチし、その役割と機能を明らかにするものである。学童保育の実態に迫るためには多角的な視点からの議論が必要とされる。その理由の一つとして、「学童保育の多種多様性」が挙げられる。学童保育は各所により、運営方法、施設、入所児童数、またその歴史が大きく異なる。97年に「放課後児童健全育成事業」として法制化された国の事業でありながら、その運営形態なども各地域によって多様性を帯びている。つまり、学童保育は国の事業と認められていながら、一般共通性を見出すことが困難な児童施策と言える。本研究は、この「学童保育の多様性」という分析困難要因について出来るだけ多くの視点を用意することで対抗し、その存在自体を明らかにすることを目指したものである。

そのための方法の一つとして参与観察による分析を用いることにした。あらゆるフィールドに共通したことであるが、一般的な枠組みを分析するだけでは、様々な人間関係が交差する場である学童保育の実態に迫ることはできない。実際にその場に足を運び体感することによってはじめて、その学童保育所をより精確に論じることができるのである。さらに本研究は参与観察による分析に加えて、社会福祉的な視点から学童保育の存在についての捉え直しを視野に入れて議論を進める。

本研究の研究スタンスは、この参与観察と社会福祉的な構造分析の両方のバランスを意識したものである。そして、それにより学童保育の今後の可能性や新たな役割を提示することを目指す。そして、「子どもたちの充実した放課後の生活とは」という命題にも考察の視野を広げることができればと考える。

学 位 番 号	人博第 438 号	氏 名	いし たに はる ひろ 石 谷 治 寛
学位授与の日付	平成 21 年 3 月 23 日		
専攻・指導教官名	共生人間学専攻 篠原 資 明		
論 文 題 目	レアリズムと幻視——一九世紀フランスの調和と自由をめぐる芸術と美学		
調 査 委 員	〔主査〕篠原 資 明 〔副査〕岡田 温 司, 多賀 茂		

論文要旨

本論では、一九世紀の半ばから世紀末における、ギュスタヴ・クールベやカミーユ・ピサロによるレアリズムの芸術の主題や表現をとりあげ、身体・自然環境・社会問題をめぐる哲学や美学、生理学・地理学・社会学の言説について考察する。本論におけるそれぞれの章は、数年ずつの時代の幅をもち、時代を特徴づけるサロンや展覧会や出来事をめぐって、それぞれ肖像画、裸婦像、静物画、風景画、労働や余暇を描いた風俗画、都市風景などのジャンルの一九世紀絵画は、写真、影絵・人形劇、工芸・映画といった映像メディアやインダストリアル・アートの発展と関連づけられる。一九世紀のパリを中心とした芸術や視覚文化といった余暇産業の成熟は、文化資本の誕生、そして産業や政治のスペクタクル化の基盤としてみなされてきた。他方で、近代の都市化に抗する社会運動のなかで、共同体への志向、地方の文化の再評価、中世への回帰や、さらにプリミティヴィズムの傾向が顕著になってくる。これらの問題が、一九世紀の芸術や美学に散見される調和と自由という概念やイメージをもとに捉えられる。

まず、第一章、第二章では、クールベの肖像画のなかの眼差しや、絵画や写真にあらわれる身体イメージを实在性や自律性という観点から論じる。第三章では、クールベと印象主義における風景画のモチーフや筆触について、同時代の進化論・熱力学に並行する地質学や地理学との関連によって考察する。さらに一九世紀末になると、主体と外部環境の調和をめぐる問題は、自然環境から社会へと移行していく。この背景には、機械化による労働形態の変化や分業があった。第四章、第五章ではピサロとその周辺の画家の作品を比較検討しながら、労働や休息のイメージのなかに、一九世紀の心理学のなかで考察されたヒステリー、憂鬱、夢想などの病理的な状態のあらわれを読みとる。第六章では、労働や余暇に関わる身体をめぐる考察された美学や社会学と、工芸や装飾本への関心との関連を明らかにする。第七章では、二〇世紀を迎えるパリの群衆とその映画的なイメージについて論じる。

以上から一九世紀の芸術をめぐる思考における、人間身体の構成や感情・情動というミクロな水準を通して、歴史や自然環境、社会的分業といったマクロな水準を包摂した全体的な展望を提示しようとする傾向を明らかにする。

学 位 番 号	人博第 439 号	氏 名	張 ^{チョウ} 黎 ^{レイ}
学位授与の日付	平成 21 年 3 月 23 日		
専攻・指導教官名	共生文明学専攻 内 田 賢 徳		
論 文 題 目	『遊仙窟』語彙と和訓についての研究 —— 複音節語を中心に ——		
調 査 委 員	〔主査〕内田賢徳 〔副査〕島崎健, 道坂昭廣, 須田千里		

論文要旨

本論文は中国唐の時代の艶情小説『遊仙窟』の語彙と和訓を複音節語の視点から考察したものである。日本に伝えられた最初の中国小説である『遊仙窟』は、文芸作品であり、訓読の面ではほかの漢籍資料と違って多くの和語らしい表現を使うという特徴がある。一方、『遊仙窟』は八千五百字にも満たないが、唐代口語を豊富に含み、その中国中世の口語資料としての価値は、魯迅の評価以来定着している。

本論文はまず疊語という複音節語の最も単純な形式の分析を通して、訓読資料としての『遊仙窟』の和訓の特徴を見出だそうとした。35 例の疊語の和訓を考察した結果、同じ疊語の和訓でも、意味の成立の必要性から要求された和訓と表現上の配慮が含まれる和訓の二種類見られることが分かった。

一方、本文に疊語漢語が 34 例存在する。それに附した和訓は二種類の形態を呈することも分かった。一種類は疊語の和訓、もう一種類は文選読みの和訓である。そのうちの 25 例は文選読みの和訓であり、残りの 9 例は疊語の和訓である。そして、25 例の漢語は唐代口語と擬態語が中心となり、難解な面は共通する。

また、『遊仙窟』に現われた唐代口語とその和訓を考察した。全語彙数の 90%以上複音節語で占めている口語語彙は 200 例以上見られる。その膨大なデータに基づいて、品詞別で分析が行われた。具体的な概念を表す名詞、動詞、形容詞の訓読は、大概熟合され、的確に訓まれる用例が多く見られる結果に対して、副詞の場合は一語と認識せず、正確に理解されていない用例が多く見受けられる結果となった。これは訓読という漢文翻訳作業の性格を示すことになると思う。

最後、『万葉集』中にある『遊仙窟』と一致する口語語彙を考察し、両者の相関性を考えた。7 例を考察した結果、文学の面で両者の交渉を強く示しているにもかかわらず、口語語彙の語法の面では、『遊仙窟』に直接した応用と判断しがたい。

学位番号	人博第 440 号	氏名	劉 ^{リュウ} 志 ^シ 偉 ^イ
学位授与の日付	平成 21 年 3 月 23 日		
専攻・指導教官名	共生文明学専攻 内田賢徳		
論文題目	「姉小路式」テニヲハ論の研究		
調査委員	〔主査〕内田賢徳 〔副査〕島崎 健, 須田千里		
専門委員	大秦一浩 (大谷大学)		

論文要旨

山田孝雄の陳述論は日本語学史において画期的な研究であることはいうまでもない。その内容は本居宣長の係り結び研究の影響を受けたとされている。しかし、宣長の研究の根源を辿ると、中世のテニヲハ論まで遡ることができる。本論文では、中世のテニヲハ論の最大勢力を成した「姉小路式」を研究対象とし、その一写本である『手耳葉口伝』を手掛かりにし、その記述に関する考察を行った。

一般的に「姉小路式」の内容は、最初のテニヲハ秘伝書である『手爾葉大概抄』と深く関係するとされている。とはいえ、「姉小路式」の項目についてすべてが『手爾葉大概抄』を拠り所としているわけではなく、その書に見られない項目も多数存在する。そのうち、「姉小路式」の著者による独自の項目も認められるが、その一部は連歌論書におけるテニヲハの記述と深い関わりを持っているように思われる。

従来の研究では、連歌論は文学的もしくは修辭的に扱われる傾向が強く、連歌論とテニヲハ論は互いに影響し合って展開していったとされながら、その具体像及び影響し合う過程が明らかにされたとは言い難い。本論文では、両文芸が交渉を有する視点から、「姉小路式」における文法項目の記述を手掛かりに、連歌論とテニヲハ論が影響し合う過程の提示を試みた。

その結果、中世を代表する『手爾葉大概抄』と「姉小路式」の記述は初期の連歌論書の影響を受けたものと結論付けた。そして、宗祇あたりまで連歌論書とテニヲハ論は各自の中心項目を守った相伝が行われたが、その後、テニヲハ論の記述がまた連歌論に影響を及ぼしたものと思われる。こうした両文芸の交渉過程に見られる変化は、表層的には、連歌と和歌との中世詩歌文学における力関係の変化によるものと考えられるが、深層的には、両文芸は切っても切れない関係にあり、文芸形式に関して相違は見られるものの、表現・修辭において相通ずる面も多々ある。表現・修辭の極みを求めようとしたがために、論理的な支えとして、一方からもう一方に目が向けられるようになったと考えられる。従って、両文芸における文法項目の交渉は必然性を有するものと見なければならぬ。

学 位 番 号	人博第 441 号	氏 名	松 下 京 平 ^{まつ した きょう へい}
学位授与の日付	平成 21 年 3 月 23 日		
専攻・指導教官名	相関環境学専攻 浅野 耕太		
論 文 題 目	社会関係資本と環境ガバナンスの双方向性因果に関する研究		
調 査 委 員	〔主査〕浅野 耕太 〔副査〕間宮 陽介, 阪上 雅昭		

論文要旨

本論文の目的は、社会関係資本と環境ガバナンスの相互関係に光を当て、それを理論と実証の双方の視点から検証することにある。具体的には次の2点を分析課題に設定した。

第1の課題として、社会関係資本は環境ガバナンスをどのように機能させるかについて検討した。得られた知見を以下にまとめる。社会関係資本は環境ガバナンスのパフォーマンスに正の影響を及ぼす。このとき、地域の実情に即さない画一的な政策は、むしろ地域の環境ガバナンスを執行する上で阻害要因となる可能性が危惧された。また、内部結束型と橋渡し型の社会関係資本は蓄積と機能の両側面において相互作用を発揮しながら環境ガバナンスに影響を及ぼす。効果的な環境ガバナンスのためには、どちらか一方のみが蓄積されているだけでは不十分で、両方の社会関係資本がバランスよく蓄積されている必要がある。

第2の課題として、環境ガバナンスを通じた社会関係資本の醸成過程について検討した。これには市民による直接的な醸成と行政による間接的な醸成とがある。前者に関しては、定量的分析およびモデル分析を援用することで、環境ガバナンスに伴う共同行動を経験することで社会関係資本が蓄積されていく過程を示した。後者に関しては、行政は社会関係資本の醸成にどのように関与できるかを具体例を用いて議論する一方、その関与の仕方には今なお克服すべき課題が残されていることを論証した。

市場の失敗や政府の失敗に象徴されるように、現行の非効率的な資源管理が問題視され始めている。人や物といったハード面ばかりではなく、人間関係といったソフト面をも視野に入れた社会関係資本の概念はそれらに続く第三の資源管理手法を提供するものであり、今後その機能についてより一層の考察が希求される。

学位番号	人博第 442 号	氏名	平山 祐
学位授与の日付	平成 21 年 3 月 23 日		
専攻・指導教官名	相関環境学専攻 山本行男		
論文題目	Development of Protein Modifying Molecules and Colorimetric Metal Ion Sensor (種々のタンパク質修飾分子の開発と比色型金属イオンセンサーの開発)		
調査委員	〔主査〕山本行男 〔副査〕山口良平, 田村 類, 畑 安雄		

論文要旨

本研究は生体内における様々な現象を解明する上で各種測定におけるツールとなる新しい分子を開発するものである。

第 1 章においては EPR 法を用いたタンパク質配向変化測定へ応用を目的とした新しい二官能基型スピラベル剤の合成を行った。得られたスピラベル剤を用いて筋肉タンパク質の一つであるトロポニン C のラベル化を行い、EPR スペクトル測定の結果から、一官能基型のものとは比べ強く固定化されていることがわかった。さらにラベル化に必要な十分な水溶性を有していることもわかった。

第 2 章では蛍光一分子イメージング法によるタンパク質の配向変化観察を目的とした新しい二官能基型蛍光ラベル剤の合成を行った。得られた蛍光ラベル剤を用いてトロポニン C のモデルペプチドとの結合実験を行い、その結合様式について検討したところ、従来の二官能基型蛍光ラベル剤を用いた場合にはペプチドとの結合後、構造異性化が起こっていたのに対し、著者が開発したものについては単一の生成物を与え、これまで問題とされていたラベル結合による構造異性化が抑制されたことがわかった。

第 3 章ではタンパク質検出のための新しいペプチドタグとそれに特異的に結合し、発光応答を示す希土類錯体の開発を行った。今回合成した希土類錯体は亜鉛イオンを介してポリアスパラギン酸と結合し、ペプチドタグ中に導入したトリプトファン残基からのエネルギー移動による希土類発光のスイッチングに成功した。さらに、このペプチドタグと希土類錯体のペアは細胞内在性物質の多数存在する夾雑系中においても機能することがわかった。

第 4 章では金クラスターを利用した水銀検出センサーの開発を行った。トリエチレングリコールをリガンドとして担持した金クラスターに各種金属イオンを加えたところ、水銀に対して特異的に色の変化が起こった。また、その反応機構について各種測定を行い検討を加えたところ、水銀イオンが金表面からリガンドを引き抜くことで金粒子が不安定化し、凝集することで色の変化が起こっていることが明らかになった。

学 位 番 号	人博第 443 号	氏 名	かめ だ ゆう いち 亀 田 勇 一
学位授与の日付	平成 21 年 3 月 23 日		
専攻・指導教官名	相関環境学専攻 加藤 真		
論 文 題 目	Diversity and speciation mechanism of the land snail genus <i>Satsuma</i> (Camaenidae) endemic to the Japanese island arc (日本島弧固有の陸貝ニッポンマイマイ属(ナンバンマイマイ科)の多様性と種分化)		
調 査 委 員	〔主査〕加藤 真 〔副査〕松井正文, 市岡孝朗, 曾田貞滋(理)		

論文要旨

有肺類は陸産貝類の中でも特に著しい適応放散を遂げた一群であり、その移動能力の低さゆえに分散過程や生殖隔離の成立過程を追跡できる数少ない生物のひとつである。本研究では日本島弧固有の陸貝ニッポンマイマイ属(ナンバンマイマイ科)に焦点を当て、分子系統解析と殻形態・生殖器形態の統計的解析をもとに、種分化パターンと生殖隔離機構の解明、ならびに分類体系の整理を試みた。

まず、属全体の分子系統解析を行ったところ、これまでの形態分類では認識されていなかった単系統群や類縁関係があることが明らかになった。各系統の分布や生態学的特徴、及び日本列島地域の地質学的知見に基づいた考察の結果、中新世後期以降の気候変動や地殻変動に伴う分断と異なるハビタットへの進出が亜属レベルでの多様化を促したと推定された。

次に、琉球列島に分布する樹上性のオキナワヤマタカマイマイ亜属について同様の解析を行った結果、オキナワヤマタカマイマイには2つの生物学的種が含まれ、その間では生殖器形態に顕著な形質置換が生じていることが判明した。

さらに琉球列島に分布する地上性のシュリマイマイ亜属(仮称)についても同様の解析を行ったところ、シュリマイマイにも2つの隠蔽種が存在し、両種は生殖器形態で識別できることが明らかになった。オキナワヤマタカマイマイ亜属とシュリマイマイ亜属は同所的に分布するが、各亜属で種間にみられた地理的遺伝構造は亜属間である程度共通していることから、両亜属の種分化は共通の地史的要因により生じたことが示唆された。

以上の結果から、本属は新第三紀後期に地理的隔離及び地上性・樹上性という生態分化を伴う亜属分化を経験したのち、それぞれの地域でさらなる多様化を遂げたと考えられる。特に琉球列島では度重なる地理的分断によって集団が隔離され、その間に生じた生殖器形態や殻の巻型の違いなどが生殖隔離機構となり、種分化と多様化をもたらしたと結論された。

学 位 番 号	人博第 444 号	氏 名	ますもと おかもと ともこ 升元 (岡本) 朋子
学位授与の日付	平成 21 年 3 月 23 日		
専攻・指導教官名	相関環境学専攻 加藤 真		
論 文 題 目	Chemical composition and ecological role of floral scent in moth- and midge- pollinated plants (蛾媒花とキノコバエ媒花における花の匂いの化学成分と生態学的役割)		
調 査 委 員	〔主査〕加藤 真 〔副査〕松井正文, 市岡孝朗, 酒井章子 (総合地球環境学研究所)		

論文要旨

花が放出する匂いは送粉者の誘引に重要な役割を果たしていると考えられている。本研究は3つの植物-送粉者系に焦点をあて、それぞれの花の匂いの化学成分とそれが担う生態学的役割を考察した。

ジンチョウゲ科ガンピ属は夜に開花し、多くの蛾に送粉される。ガンピの花の匂いは、夜にのみ放出され、オシメンなどのモノテルペン類を主成分とし、典型的な蛾媒花の匂いと一致していた。

コミカンソウ科カンコノキ属は、幼虫が種子を専食するホソガ科の蛾によって送粉され、両者は絶対送粉共生の関係にある。Y字管実験によって、花の匂いがホソガの特異的誘引に関わっていることが明らかになった。カンコノキ属5種の花の匂いは、オシメンやリナロールなどのテルペン類で構成され、それぞれの種に特異的であると同時に雄花・雌花間でもその構成に顕著な違いが見られた。ホソガは雄花で花粉を集め、雌花へ運ぶため、雌雄で異なる花の匂いがホソガの異なる行動を誘発している可能性が示唆された。また雌花は、送粉が済むと一部の成分の放出を止めたが、これは種子寄生者でもあるホソガの再訪を防ぐことに貢献している可能性が高い。

ユキノシタ科チャルメルソウ属は日本列島で多様化したキノコバエ科媒の多年草である。チャルメルソウ属12種の花の匂いを分析したところ、リナロールやライラックアルデヒドなどのテルペン類が卓越し、種ごとにその成分比が異なっていた。チャルメルソウ属には3つの送粉様式があり、その送粉様式を決めていたのは、遺伝的距離ではなく、匂い成分の類似度だった。このことは花の匂いの変化が種分化に直接関わってきたことを示唆している。

以上の結果から、蛾やキノコバエが送粉に関わるこれらの系では、花の匂いが送粉者誘引に重要な役割を果たしているばかりでなく、生殖隔離をもたらすシグナルが花の匂いの成分比であると結論できる。

学 位 番 号	人博第 445 号	氏 名	西 ^{にし} 澤 ^{ざわ} 篤 ^{あつ} 志 ^し
学位授与の日付	平成 21 年 3 月 23 日		
専攻・指導教官名	相関環境学専攻 阪上 雅 昭		
論 文 題 目	Search for cosmological gravitational-wave background at high frequencies (高周波数帯における宇宙背景重力波探査)		
調 査 委 員	〔主査〕阪上 雅 昭 〔副査〕石川 尚 人, 木下 俊 哉, 安東 正 樹 (理)		

論文要旨

本論文では、レーザー干渉型重力波検出器を用いた宇宙論起源の背景重力波の探査について述べる。そのような重力波は初期宇宙においてインフレーション等の急激な宇宙膨張によって作られ、現在の宇宙に背景波として存在しており、それらを調べる事で極初期宇宙の情報を直接的に得られるため非常に重要である。

本論文で我々が調べた内容は、「スカラー・ベクトル重力波偏極モードの探査」と「超高周波数帯での背景重力波探査」の2つに大きく分ける事が出来る。スカラー・ベクトル重力波は一般相対性理論で予言される以外の重力波の偏極モードであり、余剰次元や修正重力理論等の理論において現れる。よって、これらの重力波を検出出来れば新たな物理に関する情報が得られる。そこで、我々はこれまでの背景重力波検出の解析手法をスカラー・ベクトル偏極モードを含めて、理論モデルに依らない形に拡張した。その定式化を実際の検出器に適用し、背景重力波の各偏極モードに対する感度を導出した。

2つ目の「超高周波数帯での背景重力波」はこれまで、観測からの間接的制限は得られているものの、直接的観測はほとんど行われていない。また、存在する背景重力波量への制限も非常に弱い。そこで、我々は超高周波数帯での背景重力波観測を目指し、まず、最適な検出器デザインに関する研究を行った。その結果、シンクロナスリサイクリング干渉計 (SRI) と呼ばれるデザインが最も感度が良い事が分かった。さらに、2台の SRI の最適な配置を求めた。

ところが、シンクロナスリサイクリング干渉計は重力波信号を増幅するので感度が良くなるが、同時にミラー変位雑音も増幅してしまう事が分かった。そこで、我々は重力波信号を増幅しつつ、ミラー変位雑音はキャンセルするデザインを提案した。これは共振型速度計と名付けられている。さらに、量子論的な解析によって、原理的な雑音である量子雑音も原理に矛盾しない様にキャンセルされている事が分かった。結果、共振型速度計を利用すれば背景重力波への感度を飛躍的に高められる事を示した。

学位番号	人博第 446 号	氏名	丹羽佳 ^に 人 ^わ
学位授与の日付	平成 21 年 3 月 23 日		
専攻・指導教官名	相関環境学専攻 阪上雅昭		
論文題目	Development of Laser interferometric high-precision geometry monitor for JASMINE telescope (JASMINE 計画のためのレーザー干渉計型望遠鏡ジオメトリーモニターの開発)		
調査委員	〔主査〕阪上雅昭 〔副査〕石川尚人, 木下俊哉, 安東正樹 (理)		

論文要旨

日本の位置天文観測衛星ミッションである JASMINE 計画は、天の川銀河の中心方向にあるバルジ構造の領域を世界で初めて、近赤外線ですべて、我々から 10kpc 以内にある星々の距離や横断速度を高い信頼度で求めようとしている計画である。JASMINE 計画が目標精度を達成するためには、望遠鏡や検出器の位置やサイズの安定度が高精度で長時間、保証される必要がある。例えば望遠鏡の主鏡と副鏡間等の長さ変動に対しては、100pm オーダーの精度で 15 分間、その安定度を連続的に監視する必要がある。このような極めて微小な変動をモニターするための方法として、レーザー干渉計の技術の応用が考えられている。本研究では、レーザー干渉計を用いて、望遠鏡のジオメトリーの変位を高精度で多自由度測定することが可能な装置の開発を行った。本研究の特徴は、干渉計から測距信号を検出する方法として、光路長制御のためのアクチュエータを使用せずに長さ変動のデータを読み出すことができるヘテロダイン方式を採用した点である。これは、多自由度測定を行うとき、干渉計の光路長を制御して信号を読み出す方針をとった場合には、装置全体のシステムがかなり複雑になってしまう恐れがあり、特に、人の手で直に修理や調整ができない宇宙軌道上での使用を考えると、ヘテロダイン方式の信号検出は、非常に大きなメリットがあると考えられるからである。本研究では、ヘテロダイン型干渉計が、高精度変位センサーとして、JASMINE 計画の要求する測定精度を有するか実証するための実験を行い、15 分間で 20pm の精度、さらに 3 時間でも 100pm の精度を保持したまま測定が可能であることを実証することに成功した。

学 位 番 号	人博第 447 号	氏 名	福 ^{ふく} 岡 ^{おか} 千 ^ち 珠 ^ず
学位授与の日付	平成 21 年 3 月 23 日		
専攻・指導教官名	文化・地域環境学専攻	ヨリッセン, エンゲルベルト	
論 文 題 目	アイルランド語復興と「アイルランド人」自己意識の変容		
調 査 委 員	[主査] ヨリッセン, エンゲルベルト [副査] 岡 真 理, ハヤシ, ブライアン マサル		
専 門 委 員	佐野哲郎 (名誉教授)		

論文要旨

本論文は、独立後のアイルランド語復興の問題に焦点を当てながら、独立後アイルランド社会における「アイルランド人」自己意識の変容を明らかにするものである。

本論の出発点は、独立後に見られたアイルランド語復興に対する「失望」と「幻滅」はなぜ生じたのだろうかという疑問にある。アイルランドが独立に向かう気運を作り出すにあたって、アイルランド語復興が非常に重要であったことは広く受け入れられている。しかし、革命前の熱狂にもかかわらず、あるいはそれゆえにかもしれないが、革命後、人々のアイルランド語復興に対する「幻滅」はあまりに強いものであった。

本論では、人々の「幻滅」は、単なる言語政策の不備に対するものではなく、アイルランド語復興という目標を広めることで作り上げられてきた「アイルランド・ネーション」の定義が、アイルランド自由国成立以降、変化してしまったことからくるものではないかと考える。そうした仮説の下、本論文では、(1) アイルランド語復興の言説が、アイルランド自由国成立の頃を境として変化していったことを明らかにする。そして、(2) その重要な変化の一つとして、植民地時代はアイルランド語の「共時間性」が否定され「過去の言語」とされていたのに対し、独立後の社会では同言語が「共時間性」の中におかれるようになったことを指摘する。また、(3) 独立後のアイルランドにおいて、カトリックの英語話者、アングロ・アイリッシュ、ゲールタハトのアイルランド語話者、多言語使用者、そして北アイルランドのユニオニストという 5 つの異なる立場から、人々にアイルランド語復興の問題がどのように捉えられていたのかを分析する。その上で、それぞれの立場における、独立後の社会的変化に伴う自己意識の揺らぎを分析し、言語の問題が旧植民地における「ネーション」と自己意識とどのように関わっていたのかを分析する。

学位番号	人博第 448 号	氏名	飯 澤 功
学位授与の日付	平成 21 年 3 月 23 日		
専攻・指導教官名	環境相関研究専攻 酒井 敏		
論文題目	Urban Heat Island Circulation (ヒートアイランド循環)		
調査委員	〔主査〕酒井 敏 〔副査〕鎌田浩毅, 石川尚人		

論文要旨

Heat/cool island circulation (HCIC) is one of typical examples of horizontal convection caused by differential heating of the ground. HCIC have been studied because of being the most basic process in atmospheric dynamics. Many numerical or laboratory experiments were performed to research in HCIC. However, recent theoretical transition model of HCIC was not verified in observation for urban climatology. The purpose of this study is to verify that formation process proposed by previous numerical or theoretical studies is realized in atmosphere. We observe urban heat island and measure thermal inertia of each area to confirm that the anomaly of thermal inertia dominates formation process of heat island. New method is devised for measuring thermal inertia as a response of air temperature against radiant flux change.

(都市のヒートアイランド現象は近年大きな社会問題の一つとされ、国や自治体レベルで対策が講じられているにも関わらず、その発生要因について統一された見解は未だなされていない。その原因の一つとして、都市レベルでの十分に密な気象観測データが不足している事が挙げられる。そこで本研究では、野外における気象観測や測定を主な手法として、京都市におけるヒートアイランド現象の発生原因を特定することを目的とした。

京都市街地において、2年間に渡り季節ごとに約2週間ずつ、計8回の気象観測を行った。大通り沿いの街路樹約40点に、気温と放射収支量を連続的に測る自作の気象観測システムを設置した。その結果、ヒートアイランド現象は全ての季節において、特に晴天日の夜間に強く生じた。日ごとの放射冷却量と都市と郊外の気温差に強い相関が見られた事から、京都市におけるヒートアイランド現象は、熱フラックスに対する気温の応答が都市と郊外で異なることが主な発生原因であることが分かった。

夜間の都市キャノピー層内の空気がよく混合され、観測された気温が1km四方あたりの地域全体の表面温度を代表していると仮定したとき、熱フラックスに対する気温の応答は、地域の凹凸度合と、被覆の熱慣性の2つの要素から決まる「地域レベルの熱慣性」で決まると言える。夜間に雲が出ることによる放射収支量の変化と、気温の上昇量から、観測地点ごとに地域レベルの熱慣性の値を見積もった。その結果、都市部が郊外の5-6倍の地域レベルの熱慣性を有することが分かった。このことについて、都市部と郊外の日没後数時間の気温降下量の違いによる見積もりからも整合する結果が得られた。

さらに、都市部と郊外を代表する被覆の熱慣性を実際に測定した結果や、凹凸度合を意味する地域の表面積率を見積もった結果から算出した地域レベルの熱慣性の値も、整合的な結果となった。これにより、我々が提案したモデルの信頼性が高いことが示された。

都市部と郊外の気温差は日没後数時間で最大になり、その後は夜明けまで差をほぼ一定に保ちながら気温が降下する傾向が、典型的な晴天日で多く見られた。この時、郊外から冷気流の前線がやってきたことで気温差が頭打ちになったことを、観測結果から確認できた。このことから、日没後数時間までは地域レベルの熱慣性によって気温降下量の差が決められ、その後は郊外からの冷気流によって気温差が解消に向かうことが分かった。)

学 位 番 号	人博第 449 号	氏 名	上 ^{うえ} 尾 ^お 真 ^{まさ} 道 ^{みち}
学位授与の日付	平成 21 年 3 月 23 日		
専攻・指導教官名	共生人間学専攻 新宮 一成		
論 文 題 目	人間の科学と精神分析 —— 幻想の横断 ——		
調 査 委 員	〔主査〕新宮 一成 〔副査〕多賀 茂, 戸田 剛文		

論文要旨

今日、精神分析は、人間についての理論という立場を巡り、科学との関係におけるその意義を思想・実践の両面において絶えず問われている。これに対し本論は、科学と「人間」との関わりの中で思想史上精神分析の登場が印した画期を明らかにし、かつ精神分析思想の地平において人間を規定する諸条件について再検討を図ることで、答えようと試みるものである。

第一部においては 19 世紀以降の精神医学や人間科学の歴史を辿りながら、「人間」を規定する表象的現実の層に対し裂け目が生じる諸相を検討していく。第一章では、近代精神医学の祖であるピネルが、イデオロジーとの関係性の中で提示した狂気概念について見ることで、可視的現実と身体の不可視な力との相克に特徴付けられる人間概念の出現を確認する。第二章では、「人間」の症候学として展開する可視的現実とそこで捨象される潜在的な力としての想像力の問題を人間科学の諸領野を渉猟しながら見る。第三章では、19 世紀のヒステリー研究を通じて「見ること」そのものの理論的基盤の変化がいかに生じたかを確認する。第四章では、精神分析の幻想概念を見ることで、病理的存在としての人間と表象との関わりを検討する。

第二部においては、幻想の構造の解明を、とりわけ身体および性に焦点を当てながら行なう。第五章では、19 世紀、性倒錯理論のうちにビネが導入したフェティシズム概念を取り上げ、科学の中で性的人間に与えられた新たな規定について考察する。第六章では、精神分析理論のうちで、現実の再構築の過程としてのフェティシズムの構造を検討する。第七章においては、スペクタクル的社会関係の基底における生の問題を、フロイトのリビドー概念、およびラカンの眼差し概念を参照しながら明らかにする。最後に終章においては、以上の議論を受けながら、科学の進展における「人間的なもの」の消失と復権の可能性に関して、幻想の横断を目標と掲げる精神分析理論の射程を吟味することとしたい。

学位番号	人博第 450 号	氏名	佐野 ^{さの} (中村 ^{なかむら}) 雅子 ^{まさこ}
学位授与の日付	平成 21 年 3 月 23 日		
専攻・指導教官名	共生人間学専攻 杉万俊夫		
論文題目	地域コミュニティ活動支援と情報共有のための情報システム・デザイン —— 社会-技術的ネットワーク形成の観点から見た情報システム構築と運用 ——		
調査委員	〔主査〕杉万俊夫 〔副査〕吉田 純, 永田素彦, 上野直樹 (武蔵工業大学)		

論文要旨

本論文では、アクターネットワーク理論の観点をリソースとして、地域コミュニティを支援するという実践的な観点のもとに、情報システムのデザインがどのようにあるべきかを検討した。

その結果、情報システムは単体として評価すべきではなく、人工物や社会的要素を含んだネットワークによって成立しており、情報システムが個人によってプログラムされているように見える場合でも、実はその背後にデザインのアクターネットワークが存在し、このネットワークがデザイン主体と考えるべきであることが指摘された。

またデザインは実際の市民活動やそこから生まれるニーズによって、一意に定まるものではなく、情報システムの導入によって、活動が一定の制約を受けたり、活動そのものが再編される相互構成的な関係にあると捉える必要があることが明らかになった。アクターとしての情報システムは、それ自体が関与する人々を増やすための参加のツールでもあり、多様な利害関心を持つアクターを結びつける結節点であり、開発の過程で境界オブジェクト (Star) として位置づけられる。

以上のような分析から、従来からある情報システムデザインの方法論、例えば要求工学や、北欧型の参加型デザインには大きな限界があることが明らかになった。このような知見を踏まえて、本論文では、新たな情報システムデザインの観点を「ネットワーク指向アプローチ」として以下のようなポイントを提言した。

一点目は、アクターネットワーク理論を背景として、人や組織、活動といった社会的な要素と情報システムのような人工物などの非-人間的な要素とを、それぞれ切り分けて両者の関係を論じるのではなく、一体として状況的に形成されるハイブリッドなものと捉える観点の必要性である。

第二のポイントは、デザイン主体についての捉え直しである。開発主体は、個人や開発組織単体ではなく、それ自体、人工物を含み、多様な利害をもち、かつ、ときには離脱する流動的な集合体 (hybrid collective: Callon, 2004) だと言することができる。システム開発において、要求工学や参加デザイン論を超えて、ネットワークとしてのデザイン主体に着目し、分析することで、より有効で「使われる」システム設計の戦略を特定し提案することが可能になると考えられる。

学 位 番 号	人博第 451 号	氏 名	辻 村 優 英
学位授与の日付	平成 21 年 3 月 23 日		
専攻・指導教官名	共生人間学専攻 高橋 義人		
論 文 題 目	苦しみという名の贈りもの —— ダライ・ラマ 14 世における思いやりと普遍的責任 ——		
調 査 委 員	(主査) 高橋 義人 (副査) 山田 孝子, 田邊 玲子, 鎌田 東二 (こころの未来研究センター), 室寺 義仁 (高野山大学)		

論文要旨

ダライ・ラマは、現代社会に蔓延する孤独感や疎外感の要因を人間関係の物化のうちに見ている。そこで彼は、その解決の糸口として「思いやり」を提起する。彼のいう「思いやり」とは、他者の苦を「贈りもの」として受け取ることによって、他者を「物」ではなく、「心を有するもの」として見ることにほかならない。

第一章では、ダライ・ラマが「思いやり」を宗教の枠を超えた「普遍的チュウ」、すなわち人間である限り必要不可欠な心の質に基づいた実践として主張しようとしていることを明らかにする。そのために、ダライ・ラマの宗教観の変遷、「宗教」と「スピリチュアリティ」の区別を参照しながら、チベットの政治体制を特徴づける概念である「チュウスイスンデル」における「チュウ」の概念の変遷を分析する。「チュウ」は一般に「宗教」などと訳されるが、ダライ・ラマにおいては人々に役立つ心の質（スピリチュアリティ）に基づいた実践や、そういった心の質へと変革することをも意味している。ダライ・ラマはこれを宗教の信仰とは関係なく人々にとって必要なものとして「普遍的チュウ」と表現する。彼のいう思いやりは、「普遍的チュウ」の筆頭に挙げられるものである。

第二章では、ダライ・ラマのいう「思いやり」に互酬の論理が内在していることを明らかにする。思いやりが生じる過程で、自己は他者から贈りものを受け取る。ここで自己が他者から受け取る「贈りもの」とは、他者だけが苦しんでいるという認識である。他者の苦という「贈りもの」に報いようとする営みこそが、ダライ・ラマのいう「思いやり」である。

第三章では、「思いやり」を発展させた「普遍的責任」というダライ・ラマ独自の概念を、その語源にまで遡って分析する。そうして、その意味するところが、「贈りもの」としての他者の苦を遍く共有し、自ら他者の苦を取り除こうと応答する意志であることを明らかにする。

学位番号	人博第 452 号	氏名	やま うち りょう 山 内 玲
学位授与の日付	平成 21 年 3 月 23 日		
専攻・指導教官名	共生人間学専攻 福岡 和子		
論文題目	William Faulkner's Fiction and Questions of Southern Whiteness (ウィリアム・フォークナーの小説とアメリカ南部における白人性の諸問題)		
調査委員	〔主査〕福岡 和子 〔副査〕水野 尚之, 廣野由美子		
専門委員	丹羽 隆 昭 (名誉教授)		

論文要旨

本稿は南部特有の白人性という観点からウィリアム・フォークナー (1897-1962) の人種意識と創作の関係性を論じる。アメリカ南部の代表的な作家として知られ、フォークナーの作品における人種問題は初期の批評から注目を集めてきた。だが、それは常に「黒人問題」として扱われ、白人性は「人種」の問題として永らく検討されてこなかった。このことは白人社会の価値観や制度を暗黙の規範とする白人性の性格を示唆している。近年のアメリカ文学批評では、こうした白人中心の枠組みをジェンダーの問題と併せて問い直す趨勢にあり、1980年代以降のフォークナー研究でも、彼の作品における白人性の問題が前景化されるようになった。こうした先行研究の文脈を踏まえた上で、本稿は20世紀初頭のアメリカ南部という歴史的な文脈において、フォークナーの諸作品を分析する。彼が生まれ育ち小説を書き始めた時代は、性を巡る価値観が激的に変化し、人種、引いては白人性の枠組みが不安定な状態にあった。こうした同時代の人種と性の諸相は、単に作品の背景や設定に反映されているだけでなく、作者の創作力に根深く結びついてもいる。とくに『響きと怒り』(1929) から『アブサロム、アブサロム』(1936) の作品群では、主要男性作中人物が何らかの形で人種の枠組みから逸脱し、作者の想像力の根幹に白人性とその不安定さの問題があったことを示唆している。本稿は、人種を巡る曖昧な領域と性の問題を扱う作品の分析を通じて、南部社会の白人性の問題に対する作者の批判と韜晦という二重の態度を明らかにする。フォークナーは小説を書き続ける過程で南部社会における人種問題に対して極めて批判的な視座を獲得するに至った。だが同時に、その社会批判の根底には、不安定な人種の枠組みに対する不安とそれを包み隠そうとする人種意識も働いていた。『アブサロム』に至るまでの創作過程は、白人性の不安定さそのものを制御しようとする小説家の営みでもあったのである。

学 位 番 号	人博第 453 号	氏 名	増 ^{ます} 田 ^だ 慎 ^{しん} 也 ^や
学位授与の日付	平成 21 年 3 月 23 日		
専攻・指導教官名	共生人間学専攻 林 達也		
論 文 題 目	Adaptation of cytoskeletal and sarcolemmal proteins for functional requirements – new information for the development of fatigue resistance in skeletal muscle – (機能的要求に対する細胞骨格および筋細胞膜タンパク質の適応 —— 骨格筋の耐疲労性の発達に関する新たな知見 ——)		
調 査 委 員	〔主査〕林 達也 〔副査〕森谷敏夫, 小田伸午, 田口貞善 (奈良産業大学)		

論文要旨

高齢化社会、高度に利便化され身体活動の機会が激減した現代社会において、骨格筋の収縮機能を維持・向上させる方策を確立することは生活の質を高めるうえで喫緊の課題である。本研究は骨格筋の耐疲労性という観点から、細胞骨格および筋細胞膜タンパク質の機能的要求に対する適応を検討したものである。

第一実験では、筋細胞膜上の複合体であるジストロフィン-糖タンパク質複合体および接着斑複合体の主要成分であるジストロフィンおよび $\beta 1$ インテグリンのタンパク質発現量と、筋の機能特性を反映するミオシン重鎖 (MHC) アイソフォーム組成比との関連を、8種類のラット骨格筋と心筋について検討した。これらの複合体は筋原線維で発生した張力を外部に伝達する役割を持っている。速筋タイプの骨格筋において、ジストロフィンおよび $\beta 1$ インテグリンの発現量は type I, IIa, IIx MHC の比率と有意な正の相関を示し、type IIb MHC の比率と有意な負の相関を示した。また、遅筋タイプの骨格筋および心筋では両タンパク質の発現量は速筋よりも多かった。これらの結果は、これら2つの複合体の筋内での密度が筋の耐疲労性を規定する要因の一つである可能性を示唆するものである。

第二実験では、老化および不活動が骨格筋の乳酸代謝能力に与える影響を検討するため、骨格筋のモノカルボン酸輸送担体 (MCT) 1, MCT4 タンパク質発現量と、解糖系および酸化系代謝酵素である乳酸脱水素酵素 (LDH) およびクエン酸合成酵素 (CS) 活性を、老化ラット、不活動ラット、対照ラットのヒラメ筋および長指伸筋について測定した。ヒラメ筋では老化群の MCT1 発現量は他の二群より有意に低く、長指伸筋では老化群の MCT4 発現量は他の二群より有意に高かった。また、ヒラメ筋の LDH/CS 比は老化群・不活動群で対照群より有意に高く、長指伸筋の LDH/CS 比は老化群では他の二群より有意に低かった。老化は不活動と異なり、運動中の骨格筋内の乳酸蓄積を抑制する方向に代謝特性を変化させることをこれらの結果は示唆しており、動員する筋量が比較的少ない運動では高齢者が若齢者よりも筋持久力が高く、運動中の乳酸蓄積も少ないという先行研究の結果を裏付けるものである。

学 位 番 号	人博第 454 号	氏 名	やま だ よう すけ 山 田 陽 介
学位授与の日付	平成 21 年 3 月 23 日		
専攻・指導教官名	共生人間学専攻 小田 伸 午		
論 文 題 目	高齢者の身体組成と身体活動量の簡便で精確な推定 法：二重標識水法を用いた検証		
調 査 委 員	〔主査〕小田 伸 午 〔副査〕森谷 敏 夫, 林 達 也, 神崎 素 樹		

論文要旨

本研究では、最終的に高齢者の身体組成と身体活動量を簡便でありながらできるだけ精確に推定する方法を開発するために、それぞれの方法における仮定を認識することからはじめ、正常な老化あるいは身体機能低下で起こる生理的な変化を観察し、その結果を踏まえて、高齢者で身体組成と身体活動量を評価する方法を検討した。具体的には、生体電気インピーダンス (BI) 法 (部位別・多周波)、加速度計法 (1 軸型・3 軸型)、簡易版生活記録表の妥当性を検討した。

まず、部位別 BI 法において、水分あるいは筋の情報を反映する生体電気インピーダンス (BI) インデックスの下腿に対する大腿の比は、正常な老化では男女ともに加齢に伴って一律に低下し、さらに移動機能が低下した高齢者ではより低値を示し、肥満者でも低値を示した。これらをモデルに組み込んだ新しい BI 法を開発し妥当性を検討した。その結果、年齢、性、体重といった経験変数を組み込むことなく測定値のみで精確な身体組成推定ができる可能性が示された。

次に、多周波部位別 BI 法において、下肢の細胞外液・内液量を評価したところ、除脂肪量に占める細胞外液量が老化に伴って相対的に増加し、さらに年齢とは独立して移動機能低下の影響も受けていた。そして、細胞内外液分布が高齢者の身体機能の評価する一変数として有効であることが示された。また、この細胞内外液を考慮したモデルを BI 法に適用する方法を提案し、その妥当性を検証した。

最後に、身体活動量について、加速度計を用いた方法と生活記録表を用いた方法の妥当性を検証した。高齢者では、3 軸加速度計を用いた方法では 1 軸加速度計で評価できないエネルギー消費を推定できることが明らかになった。また、記入漏れがないように工夫した簡易版生活記録表を用いた方法も比較的精確なエネルギー消費量推定が可能であった。さらに、日常生活での家事での身体活動が多く、睡眠や休息している時間が少ないことに加え、スポーツ活動の従事時間も全体の身体活動レベルを決定する因子であることが示され、高齢者における家事やスポーツ活動の重要性が示唆された。

学 位 番 号	人博第 455 号	氏 名	吉 住 美 保
学位授与の日付	平成 21 年 3 月 23 日		
専攻・指導教官名	共生人間学専攻 大東 祥 孝		
論 文 題 目	The Frontal Systems Behavior Scale 前頭葉機能に関する行動評価尺度の日本語版の開発と応用 —— 統合失調症における社会行動障害に関する病識		
調 査 委 員	〔主査〕大東 祥 孝 〔副査〕船橋新太郎, 齋 木 潤, 村 井 俊 哉 (医)		

論文要旨

社会行動障害は、気質性及び内因性精神疾患によって生じることが知られている。その評価には神経心理学的検査を行う方法と、日常生活における行動パターンの変化を観察する方法とが考えられてきた。しかし、これまで多くの前頭葉損傷患者、特に腹内側前頭前皮質損傷患者では、著名な生活上の行動障害を示しながら、神経心理学的検査では異常が見出されないことが指摘されてきた (Eslinger, P., Damasio, A. R. 1985)。また、前頭葉機能の評価尺度によって神経学的疾患患者の行動学的変化を定量化することが出来ても、前頭葉の多様な症状を統括して取り扱うことは出来なかった。多くの評価尺度は比較的時間がかかり、検査者は訓練されている必要がある等の点で、臨床の現場で使うには限界があることが指摘されている (Grace, J., Malloy, P. F. 2001)。神経心理検査は、それ自体は検査バッテリーとして大事であるが、それだけでは捉えられないような行動様式については、質問紙を用いて捉えるというように、それぞれの尺度の特性を活かして、全体を捉えようとするのが大切である。これらのことを踏まえて Frontal Systems Behavior Scale (FrSBe) が開発された。FrSBe は、特別なものではないが、日常生活によく見られる問題を定量化して整理出来ることに意義がある。そこで本論文では、日本語版 FrSBe の開発を試みた。

本論文の第 1 章においては、米国で作成された FrSBe の日本語版を作成し、その信頼性・妥当性を検討した。この結果から、日本語版 FrSBe が前頭葉機能に関する社会行動障害を評価する尺度として有用であることが示された。

続く第 2 章では、第 1 章で紹介した日本語版 FrSBe を用い、自己評価得点と観察者評価得点の差を比較することで、自他の得点差を病識の尺度として応用し、統合失調症における前頭葉機能に関連するドメインごとの社会行動障害に関する気づきの本質を調査した。その結果、第一に統合失調症では、前頭葉に関する行動の 3 領域全てにおいて障害されていることが分かった。さらに、その病識の病態メカニズムは認知機能と関連があることが示された。

本研究により、統合失調症患者における社会行動障害についての病識は、全般的な推定 IQ と関連することが示され、高 IQ 群では自己の行動障害を実際より重く見積もる傾向があり、低 IQ 群ではそれとは反対の傾向が認められた。さらに、現在から発症前のことを回顧的に振り返って評価した際にも、病識と IQ について同様のパターンがみられた。

Eslinger, P. J., Damasio, A. R. Severe disturbance of higher cognition after bilateral frontal lobe ablation : Patient EVR. *Neurology*. 1985 ; 35 (12) ; 1731-1741.

Grace J, Malloy PF: Frontal Systems Behavior Scale professional manual. Psychological assessment resources Inc, Florida, 2001

学 位 番 号	人博第 456 号	氏 名	奥 ^{おく} 田 ^だ 泰 ^{やす} 広 ^{ひろ}
学位授与の日付	平成 21 年 3 月 23 日		
専攻・指導教官名	共生文明学専攻 中西輝政		
論 文 題 目	イギリスにおける対外戦略の形成システムの変容 —— 国家戦略とインテリジェンスの相互作用（1902- 1939 年）		
調 査 委 員	〔主査〕中西輝政 〔副査〕西井正弘, 川島昭夫		

論文要旨

本論文は、1902 年から 1939 年にいたるイギリスにおける対外戦略の形成システムの変容を、国家戦略とインテリジェンスとの相互作用に着目しながら考察するものである。

1902 年、イギリスでは帝国防衛委員会（CID）という対外戦略の検討機関が設置され、今日では世界各国で設置されている「国家安全保障機構」の先駆けとなった。CID は首相の諮問機関として設置された内閣の一委員会であったが、やがて対外戦略の形成システムのなかで中心的な機関となり、実質的にイギリスにおける対外戦略の形成システムを変容させていくことになる。20 世紀初頭に CID が設立されたのは、国際環境の変化に対応しようとしてなされたものであった。19 世紀のドイツ統一戦争以降において戦時と平時との区別が曖昧になっていき、やがて二度の世界大戦において「総力戦」が登場することになったが、そのような国際環境の変化は、「軍事」と「外交」という二つの領域を国家が総合的に把握する必要性を生み出したのである。

とはいえ、これまでの研究においては、CID という国家安全保障機構を国防政策や政軍関係の視点のみから考察することが多かった。しかしながら、それでは CID がイギリスにおける対外戦略の形成システム全般に及ぼした影響を十分に把握できるものとは考えにくいため、本論文は、「国家戦略」と「インテリジェンス」との相互作用に特に着目しながら、CID の設立が及ぼした影響の全体像を捉えようとしたものである。とくにインテリジェンスは、組織運営の効率化と秘密情報の入手という二つの側面において国家戦略の形成に大きな影響を及ぼしたものであり、ここではその影響の具体的なあり方について重点的な考察を行った。

学 位 番 号	人博第 457 号	氏 名	<small>ヘレナ グリンシプン</small> Helena Grinshpun
学位授与の日付	平成 21 年 3 月 23 日		
専攻・指導教官名	共生文明学専攻 ハヤシ, ブライアン マサル		
論 文 題 目	‘My Cup’ of Coffee : Analyzing Starbucks as a Social and Cultural Space in Japan and in Israel (コーヒーを「マイカップ」で —— 日本とイスラエルにおける社会的・文化的空間としてのスターバックス ——)		
調 査 委 員	[主査] ハヤシ, ブライアン マサル [副査] 前川 玲子, 勝又直也		

論文要旨

1996年に日本に上陸して以来、スターバックスチェーンは日本の消費者の間で絶大な人気を誇っている。スターバックスが日本にコーヒー文化を紹介したわけではない。それにも関わらず、スターバックスは新たな流行や嗜好をもたらし、地方のコーヒーショップ市場において新しい地位を築いてきた。スターバックスの成功は、また別のコーヒーチェーンの誕生を促し、現代都市におけるコーヒーショップの様相に新たな変化を生み出してきた。

イスラエルにおいては、スターバックスは2001年に進出し始めた。しかしながら、地方のコーヒーショップ市場の中へうまく参入していくことができず、2年後には売上不振で閉店せざるを得なくなった。その後スターバックスはイスラエルのコーヒー市場に参入する意志を見せていない。このスターバックスの失敗の原因について、メディアは様々に言及したが、まだ十分な考察がなされたとは言えない。

スターバックスがどの国においても同じ戦略で事業を展開するグローバルなチェーン店であるという事実を踏まえると、成功を収めた日本と失敗に終わったイスラエルの二つの事例を比較することで、社会的にも文化的にも異なる国々において他国からの流行がどのように受容され、あるいは拒絶されるかという事象に新たな考察を加えることができると思われる。

本研究では、スターバックスを主要な文化的・社会的機能を果たそうとするある種の公共空間として捉え、日本のスターバックスが社会的・文化的意味を付与された空間を作り上げることができた一方で、それとは対照的にイスラエルではそのような空間を生み出すことには成功しなかったことを論証する。本論文により、スターバックスの成功と失敗を決定づけた歴史的、社会的、文化的要因に新たな光をあてることができるであろう。

学 位 番 号	人博第 458 号	氏 名	<small>ラウル ゲレーロ プラサ</small> Raúl Guerrero Plaza
学位授与の日付	平成 21 年 3 月 23 日		
専攻・指導教官名	共生文明学専攻	ハヤシ, ブライアン	マサル
論 文 題 目	Power, Media and Minorities: The <i>Gitano</i> and <i>Dówa</i> Issues in the Spanish and Japanese Press during the 1990s (権力, メディア, マイノリティーの関係についての一考察——1990年代のスペインの新聞におけるロマの扱いと日本の新聞における同和問題の扱いの比較を通して)		
調 査 委 員	〔主査〕 ハヤシ, ブライアン マサル 〔副査〕 前川 玲子, 岡 真理		

論文要旨

本論文の目的はスペインと日本の主要紙二紙の比較を通じてメディアがマイノリティー（社会的少数）をどのように扱っているかを明らかにすることである。やや左寄りのリベラリズムというイデオロギー上の類似点を持つことから、スペインの『エル・パイス』紙と日本の『朝日新聞』を分析の対象とし、『エル・パイス』紙におけるロマ（ジプシー）に対する報道姿勢と『朝日新聞』の被差別部落民に対する報道姿勢を比較した。同時に、それぞれの国でマイノリティー、メディア、権力がどのような関係を持っているかについても論じた。

論文は第一部「スペインと日本における権力」、第二部「スペインと日本におけるマスメディア」、第三部「スペインと日本における、1990年代のマスメディアとマイノリティーの描写」の三部構成からなり、歴史的背景、批判的言説分析、そしてエスニックスタディ（民族研究）の三つの見地からのアプローチを試みた。批判的言説分析は権力が世論やイデオロギーの形成に及ぼす影響の分析に有効である。また、エスニックスタディの点からのアプローチを行うことで、差別問題を単なる人種問題以上のものとして分析することが可能である。そして、この二つのアプローチは政治的、社会的エリート階級の思想がどのように一般大衆に影響を及ぼすかを論じる際にも有効である。

以上の考察を通して、スペインにおいてはメディアがマイノリティーの状況改善のために積極的な役割を果たしているのに対し、日本では被差別部落民の政治活動の結果、メディアが差別問題に目を向けて協力的態度をとってきたことが明らかになったが、本論ではスペインの新聞の態度を事前型モデル、日本を反応型モデルとして分類した。

学 位 番 号	人博第 459 号	氏 名	呉 宛 怡
学位授与の日付	平成 21 年 3 月 23 日		
専攻・指導教官名	共生文明学専攻 赤松紀彦		
論 文 題 目	明清時代の女性と演劇		
調 査 委 員	〔主査〕赤松紀彦 〔副査〕江田憲治, 道坂昭廣, 井波陵一 (人文研)		

論文要旨

本論文は中国明清時代の女性と演劇との関係について考察する。

第一章から第四章までは主に明清の演劇作品における様々な女性の形象について解明したものである。

第一章『玉簪記』の折子戯における女性像の変化』では、明代演劇作品の中でも特に『玉簪記』を取り上げ、そこに描かれた女性像について明らかにした

第二章「明清時代の演劇作品における女俠の形象（一）—— 剣俠の系統に属する演劇作品を中心として」、第三章「明清時代の演劇作品における女俠の形象（二）—— 『紅拂女』、『識英雄紅拂莽択配』、『墨憨齋重定女丈夫傳奇』を中心に」では、いままで殆んど論じていなかった明清時代の演劇作品において「女俠」の形象をめぐって分析することを目的とする。女俠を中心とする演劇作品はすべて唐代の豪俠小説から取材するものであり、二つの系統がある。一つは剣俠系統に属する作品であり、もう一つは情俠系統に属する作品である。第二章および第三章では、描写のスタイルが異なる二つの系統の演劇作品の系統をそれぞれ分析し、演劇作品における女俠の形象を明らかにすることを試みた。

第四章「馮夢龍『墨憨齋定本傳奇』における女俠の形象——『女丈夫』、『新灌園』を中心に」は、馮夢龍によって改作された演劇作品である『女丈夫』『新灌園』における女俠の形象を検討するものである。『女丈夫』と『新灌園』における女俠の形象と原作を比較し、その形象の異同を検討した。

第五章「明代の女優及びその困境」では女優を取り上げて考察した。

第六章「明清時代の女性観客と観劇禁制について」では、具体的な事例を取り上げ、女性への観劇禁制を比較検討し、その中に隠された意味と理由を探った。さらに、これまで取り上げられることのない女性作者による詩詞作品を通して、当時の女性の観劇風景や演劇に対する意識を明らかにした。

学 位 番 号	人博第 460 号	氏 名	黄 ^{コウ} 明 ^{メイ} 月 ^{ゲツ}
学位授与の日付	平成 21 年 3 月 23 日		
専攻・指導教官名	共生文明学専攻 赤松紀彦		
論 文 題 目	東北アジア創世神話に関する比較研究		
調 査 委 員	〔主査〕赤松紀彦 〔副査〕内田賢徳, 道坂昭廣		

論文要旨

本論文は、東北アジア諸民族の創世神話における構造分析を出発点として、東北アジア諸民族神話の變化する神話的要素と共通する神話的要素について検討することにより、諸民族の信仰・世界観・宇宙論を構造的に理解しようとしたものである。神話は、時代の流れと民族間の交渉の中で絶えず變化してゆく。東北アジア諸民族の神話も、時代の中で柔軟に變化してゆく神話的要素と、動かない神話的要素があって、両者の相關の上に、独自の様相をみせている。従って、時代の流れと文化の交渉の中で神話的要素を理解することが求められる。このような観点から、本論文は東北アジア諸民族神話について、構造主義分析という極めて明確な原則に従って、比較分析を行い、その結果、東北アジア創世神話の構造的特殊性を、比較神話學的な観点から明らかにするような成果が得られた。

本論文は「創世神話篇」と「傳播論についての再検討篇」の二つの部分からなる。第一部では、創世神話に現れる各神話的要素に着目した。これらの、神話の變化する神話的要素と共通する神話的要素に対する検討を通じて、各民族の信仰や世界観、宇宙論を見出すことをめざした。

第一章では、獨神による創世、第二章では、配偶神による創世、第三章では、「原初の創世」・「洪水」・「文化」の、相繋がる一連のものとして語られている三つの神話的要素、第四章では、創世神話における「水」のシンボリズム、第五章では、洪水を契機とする「神格の變異」、第六章では、「原初の神の隱退」、第七章では、神々の英雄的性格に焦點を当て、時代の流れと文化の交渉の中で、變化する神話的要素と共通する神話的要素を見出すことで、個々の神話的要素の意味を明らかにするような成果が得られた。

次に本論文は、日本神話の傳播論を再検討する作業に入る。第二部では、記紀神話のルーツの一端として示されてきた従来の説について再検討を試みた。第八章では、朝鮮半島から傳わったとする、記紀神話の「天孫降臨」について、第九章では、古くから東南アジア系統を引く話と見做されてきた『古事記』の「稻羽の素戔禰」について、第十章では、「稻羽の素戔禰」の韓國からの傳來說について再検討を行い、新たな見解を示した。

本論文は、以上のような作業を通じて、東北アジア創世神話の構造的特殊性を、比較神話學的な観点から明らかにするとともに、東北アジア諸民族神話を東北アジアという枠組みの中で読み直すことを試みたものである。

以上が本論文の概要であるが、その内容は多岐にわたっている。中でも ① 東北アジアという枠組みの中で國際的な視野を持って、諸民族神話について構造的比較を行った点。② 朝鮮半島からの傳來說が主流だった、記紀神話の神話的要素を、東北アジアという枠組みの中で捉える、全く新しいアプローチがなされていること。③ 創世神話における「神格の變異」、「原初の神の隱退」など、新しい東北アジア創世神話の共通要素を見出したこと。④ これまで注目されなかった満州や蒙古など多様な神話を収集整理、再構成して比較研究している点など、本論文が今後の東北アジア神話研究に新たな視点と可能性を提供できたのではないかと考えている。

学 位 番 号	人博第 461 号	氏 名	林 ^{はやし} 信 ^{しん} 蔵 ^{ぞう}
学位授与の日付	平成 21 年 3 月 23 日		
専攻・指導教官名	共生文明学専攻 稲垣直樹		
論 文 題 目	ゾライズムの射程 ——永井荷風の初期作品をめぐって		
調 査 委 員	〔主査〕稲垣直樹 〔副査〕松田 清, 須田千里, 多賀 茂		

論文要旨

永井荷風（1879–1959）の初期作品（1902–1903）にエミール・ゾラ（Émile Zola 1840–1902）からの顕著な影響が見られることは、すでに周知の事実である。本論文では、ゾラの原作、その英訳、荷風の初期作品のテキストをより精緻に比較することをとおして、先行研究の指摘を補完し、荷風の初期作品を再評価することを目指した。

ゾラの文学的方法論、すなわち文学における自然主義は、ゾラの文学的キャリアの中で繰り返し主張されてきたものであるが、ゾラを取り巻く環境の変化に応じて微妙にその内容を変えていた。荷風は、ゾラの理論的言説のなかから、生物学的リアリズムというコンセプトを摂取し、その初期作品の執筆に生かした。

ところで、ゾラ作品において自然主義理論は、しばしば厳密には実践されないこともあった。たとえば、ゾラ作品において語られる遺伝や人間に対する環境の影響といったものは、神話や詩など、非科学的要素を多分に含むものであったことが、すでに指摘されている。そして、このようなゾラの文学的实践における科学と文学の混淆は、荷風の初期作品に対しても看過することのできない影響を及ぼしている。

また、自然主義理論に関するものだけでなく、荷風は、ゾラの文学的実践の美的なアспектについても優れた理解を示しており、ゾラのさまざまな情景描写のカノンや自由間接文体といった語り方の特徴をその初期作品のなかである程度忠実に再現している。

たしかに、荷風は後にゾラ自然主義理論に対して否定的な見解を述べるようになった。しかし、自然主義は、ゾラの多様な文学的実践のなかのひとつの要素に過ぎず、荷風がゾラから学んだもののいくつかは、荷風の後の文学的実践のなかでもしばしば重要な役割を果たすものであったと考えられるのである。

学 位 番 号	人博第 462 号	氏 名	益 ^{ます} 満 ^{みつ} ま を
学位授与の日付	平成 21 年 3 月 23 日		
専攻・指導教官名	共生文明学専攻 松田 清		
論 文 題 目	赤外線画像解析による『世界四大洲新地図帳』の書誌的研究		
調 査 委 員	〔主査〕松田 清 〔副査〕稲垣直樹, 川島昭夫		

論文要旨

徳川家の駿府移封（1868）にともなって静岡へ運ばれた徳川幕府旧蔵書は、昭和四十五年の開館以来、静岡県立中央図書館の特殊コレクションとして「葵文庫」の名を冠せられている。葵文庫所蔵『世界四大洲新地図帳』（*Nieuwe Atlas, Inhoudende De Vier Gedeelten der waereld.* アムステルダム、コーフェンス・モルチール社、1783年頃刊、全2冊）は、老中首座松平定信の命によりオランダ通詞本木良永が翻訳した幕府旧蔵の世界地図帳である。江戸時代に舶載された世界地図帳の中で当時最もよく研究されたものであり、江戸時代における天文および世界地理情報の貴重な典拠である。

本木良永は、翌寛政二（1790）年九月に『新地図帳』の抄訳および解説を『阿蘭陀全世界地図書訳』（天理図書館所蔵、本木良永自筆著訳、三巻三冊）として幕府に献上した。この上呈本については神崎順一による翻刻と解説がある。また、長崎市立博物館に稿本（三巻一冊）があることが知られている。

多数の天文・地理書を著訳した蘭学者でもあった本木良永（1735-1794）は、『阿蘭陀全世界地図書訳』において第1冊冒頭の刻版標題紙、標題紙、目録（含、下巻目録）、天球図、地球図、北半球図、南半球図のみを解説付きで翻訳しているが、『新地図帳』では上下2冊の前付け頁および収録地図全葉にわたって、標題の一部および主な地名に金紙または銀紙の付箋を貼り付け、訳語を墨書している。これらの付箋は大半が化学変化のため黒く変色し訳語は判読困難になっており、長らく研究のさまたげとなってきた。

本稿は、静岡県立中央図書館葵文庫所蔵『世界四大洲新地図帳』を対象として、書誌的調査および近赤外線 CCD カメラによる付箋撮影を行い、その撮影データ解析結果を基に、本木良永の翻訳過程を明らかにし、訳語の分析を行った。また、同時代の他の訳語と比較し本木の翻訳の特徴について考察した。

学 位 番 号	人博第 463 号	氏 名	やまもと ゆうき 山 本 友 紀
学位授与の日付	平成 21 年 3 月 23 日		
専攻・指導教官名	共生文明学専攻 稲垣直樹		
論 文 題 目	脈動する「オブジェ」と「色彩」 —— フェルナン・レジェの創作活動の軌跡 ——		
調 査 委 員	〔主査〕稲垣直樹 〔副査〕松田 清, 篠原資明, 多賀 茂		

論文要旨

本論文では、20 世紀前半に活躍した画家フェルナン・レジェの創作活動の諸相を、当時の様々な芸術的潮流を視野に収めながら、「オブジェ」に関する概念と「色彩」の取り扱い方を中軸に据えた統一的視座によって捉えることを目指した。

キュビストの画家として出発したレジェは、身の回りの視覚的世界を多角的に捉えながら自身の内面で統合することを目指していた。「概念的なリアリズム」という言葉で示されるそのような造形的世界は、「オブジェ」と「自由な色彩」を基本単位とした、「コントラスト」という表現方法が基盤となっている。また、「主題」、物語性、個人的な感情表現の否定と密接に関連した、「オブジェ」に関するレジェ独自の概念は、バレエの舞台装飾や映画といった絵画とは異なる分野の作品の構想においても基本軸をなしている。

機械の美的価値や建築に関するレジェの概念に大きな影響を及ぼしたのが、「秩序への回帰」を志向したピュリスムの芸術運動であった。ピュリスムとの親交を通じて、レジェは絵画を建築に結びつけることを可能とする壁画制作にも関心を示し、装飾芸術の捉え方をめぐって、「オブジェ」と「自由な色彩」に関する概念をより先鋭化させている。それと並行して、レジェは自然界の観察を通じた「オブジェ」の新たな側面から、様々な抽象的形態のモチーフを引き出すことで、抽象性の高い絵画作品を創出するに至った。レジェはそうした芸術的実践から、「新しいリアリズム」という概念を導き出している。この概念は、「オブジェ」を基盤に据えた「偉大な主題」への取り組みによって、芸術が社会的役割を担うという画家の主張の強力な支えとなっており、その実現に向けた試みは一般民衆の生活を取り上げた絵画作品のなかにみることができる。モザイク画、ステンドグラス、陶製彫刻など、モニュメンタルな作品群には、人間と世界の関わりを示そうとする画家の努力の成果が表れていると同時に、彼独自の「オブジェ」の概念と色彩感覚の本領が発揮されている。

学 位 番 号	人博第 464 号	氏 名	やま もと たつ や 山 本 達 也
学位授与の日付	平成 21 年 3 月 23 日		
専攻・指導教官名	共生文明学専攻 田中雅一		
論 文 題 目	伝統／現代を生きるディアスポラ ——北インド・ダラムサラのチベット難民舞踏集団 TIPA を事例に		
調 査 委 員	〔主査〕田中雅一 〔副査〕山田孝子, 田辺明生, 橋本和也 (京都文教大学)		

論文要旨

本論文は、北インド・ダラムサラ在住チベット難民舞踊集団 Tibetan Institute of Performing Arts (以下 TIPA) を事例として、伝統的なチベット文化表象と現代的なチベット文化表象に携わる人々のさまざまな実践に焦点を当てたものである。そして、そこで行われる文化政治を記述するとともに、演者としてそこに生きる人々を描き出すことを目的とするものである。そのなかでも、文化表象に自ら関わりながらもディアスポラの生を送る演者たちの困難を描き出すことを最大の目的としている。

本論文では、ディアスポラ研究、アイデンティティ・ポリティクスを初めとした文化の客体化論や、チベット難民研究などの近年の文化人類学的研究が先行研究として挙げられている。これらの研究は、犠牲者としての現地人という視点を打破しようとし、現地の人々の創造性を称揚してきた。しかし、一方で、集団的なレベルでの議論に終始したり、したたかな主体による抵抗といった方向で議論を進めたりと、そこで文化政治に関わりながら生きている人々が直面する葛藤や悩みといった側面を捨象してきた。その結果、そこで形成されたのは、強固な団結を維持したり、生活の便宜で抵抗したりする、自分たちとは異なった戦闘的主体観に基づいた人物像であった。彼らは再び他者になってしまった、今度は理想化された形で。

しかし、難民状態で生活し、文化の表象に従事する人々は、積極的戦闘的にのみ事態に参加しているわけではない。彼らも、我々同様、悩み、葛藤する「ひと」なのだ。本論文は、伝統と現代双方に関与する TIPA の文化政治をマクロな視点から描き出すと同時に、その文化政治のなかで揺れ動く人々に着目し、描き出す。そして、これらの事例を通して、これまでの研究が構成してきた主体観を再考する。

学 位 番 号	人博第 465 号	氏 名	朱 銀 花
学位授与の日付	平成 21 年 3 月 23 日		
専攻・指導教官名	共生文明学専攻 阿辻哲次		
論 文 題 目	日・中・韓三国の言語における動物文化の比較考察 ——「馬」,「牛」,「犬」,「猫」にまつわることわざを 中心に——		
調 査 委 員	〔主査〕阿辻哲次 〔副査〕赤松紀彦, 道坂昭廣, 小倉紀蔵		

論文要旨

日本, 中国, 韓国の三国は, 儒学や仏教を思想の土台とした同じ漢字文化圏に属しており, 歴史や文化等いろいろな面において関連が深く, 二千年余の長い交流を持っている。従って, 三国の言語や文化をめぐる研究は東洋比較文化研究の焦点として従来歴史学, 言語学, 社会学など様々な観点から研究がなされてきた。近年, 比較言語学において異なる学問分野の融合による研究が多く行われており, その成果もかなり多い。しかし, 日・中・韓三国の言語, とくにことわざに関する比較研究は, 今まで慣用表現の意味や構造等の比較が主流で, ことわざの中の動物に焦点をおき, 文献学や統計学等多様な方法論を用いて, 動物と社会, 言語の三者を共に取り上げる比較研究は殆ど行われていなかった。本研究では, 日・中・韓三国の比較文化研究の一つの新たなアプローチとしてことわざ学と動物文化史を両者結合させて比較と考察を行った。

本論文では, まず三国のことわざ辞典からそれぞれ動物を素材としたものを抽出し, これらのことわざの用例を基本的資料として分析と整理を行い, 本論の考察に用いるデータを統計した。そして, 三国のことわざに最もよく用いられる馬, 牛, 犬, 猫の四種の動物を考察対象に選定し, 三国におけるこれらの動物の家畜文化とことわざに現れる役割との関連をめぐって, 主に文献学的考察と比較を行った。更にこのような役割の比較考察を踏まえ, 三国のことわざに現れるそれぞれの動物のイメージ象徴を分類し比較を行い, 三国の間に生じる差異の究明に努めた。

日・中・韓三国の馬, 牛, 犬, 猫にまつわることわざに関する比較考察を通じて, これらの動物がそれぞれの国において果たした役割機能の差異がことわざにおける出現頻度やイメージに密接な関連を持つことが分かった。また, 日本, 中国, 韓国を同時に取り上げて比較することにより, 三国間の動物をめぐる交流の歴史や文化, 民族性等を含め, その全体像を描いた。

学位番号	人博第 466 号	氏名	石橋孝一
学位授与の日付	平成 21 年 3 月 23 日		
専攻・指導教官名	相関環境学専攻 津江 広人		
論文題目	窒素原子を配した大環状かご型化合物の合成と物性に関する研究		
調査委員	〔主査〕津江 広人 〔副査〕山口良平, 山本行男, 田村 類		

論文要旨

本論文は、窒素原子の有する特異な性質を反映した新規機能性材料の構築を目的として、フェノール骨格が窒素原子で架橋された新規大環状かご型化合物「アザカリックスアレーン」の合成ならびにその物性について述べたものであり、4章で構成されている。

第1章では序論として、カリックスアレーンを用いた超分子化学および分子磁性化学について概説した後、同骨格への窒素原子の導入により発現が期待される物性について言及した。

第2章では、環状四量体および環状六量体の合成法を確立し、X線結晶構造解析ならびにNMR法を用いて分子構造の評価をおこなった。その結果、環状四量体は架橋窒素原子と芳香環との共役に起因した電子的および立体的要因により結晶中および溶液中において堅固な1, 3-alternateコンホメーションをとること、および、架橋窒素部位の置換基の配置によりキラリティーが発現することを見いだした。また、環状六量体は架橋部位が関与する分子間水素結合により一次元ナノチャンネル型の結晶構造を与えることを明らかにした。

第3章では、合成された環状化合物の機能として気体吸蔵特性の検討をおこなった。結晶中でナノチャンネル構造を有する環状六量体は迅速かつ選択的に二酸化炭素を吸蔵した一方、結晶中で密に充填された化合物では気体の吸蔵は認められなかったことから、結晶構造と気体吸蔵特性との間に相関関係があることを見いだした。さらに、環状六量体で観察された二酸化炭素の選択的な吸蔵には、分子ふるい効果に加えて、水素結合もしくは四重極子モーメント/誘起双極子モーメント相互作用が関与していると結論づけた。

第4章では、合成された環状化合物の電気化学的特性とその酸化種のスピン状態について考察をおこなった。その結果、環状四量体は二電子酸化過程まで安定であり、得られたジラジカル種は基底三重項状態であることを明らかにした。さらに、環サイズの異なる環状化合物の酸化挙動の比較から安定な酸化種を得るための分子設計指針を提示した。

学 位 番 号	人博第 467 号	氏 名	うちだ よしあき 内 田 幸 明
学位授与の日付	平成 21 年 3 月 23 日		
専攻・指導教官名	相関環境学専攻 田村 類		
論 文 題 目	Studies on Magnetic, Electric, and Optical Properties in the Condensed Phase of Nitroxide Radicals (ニトロキシドラジカルの凝縮相における磁気・電気・光学的性質に関する研究)		
調 査 委 員	〔主査〕田村 類 〔副査〕山口良平, 山本行男, 津江 広人		
専 門 委 員	山内 淳 (名誉教授)		

論文要旨

本論文は、ニトロキシドラジカル化合物の合成と、その凝縮相（結晶相と液晶相）における光学・電気・磁気の各物性について述べており、5章で構成されている。

第1章は序論である。一般に、有機材料の長所として、光透過性や溶解性、生体適合性、柔軟性等が挙げられる。今日ではそれらに加えて、かつて無機材料のみが示すと考えられていた超電導性や光伝導性、強磁性などの有用な電気・磁気物性を示す有機材料も広く知られるようになった。中でも、純有機強磁性体の、液体磁石、磁歪素子、磁性LB膜等の新しい材料への応用が期待される。このような背景から、ニトロキシドラジカル液晶に注目した経緯について詳述し、本研究の目的と分子設計について述べた。

第2章では、ニトロキシドラジカル結晶の磁性について述べた。ニトロキシ基の酸素と隣接する分子内のニトロキシ基の β -炭素の間で半占軌道 (SOMO) 同士の重なりが生じ、これにより反強磁性的相互作用が発現することを、単結晶 X 線構造解析と密度汎関数計算により明らかにした。

第3章では、新しいキラルニトロキシドラジカル液晶の合成と物性について述べた。三系統のキラルニトロキシドラジカル液晶の偏光顕微鏡観察、粉末 X 線回折、示差走査熱量分析等に基づいて、電気双極子モーメントの方向と大きさが液晶の相転移挙動と強誘電性に影響することを明らかにした。

第4章では、ニトロキシドラジカル液晶の二種類の磁場応答性について述べた。まず、水面に浮かべたニトロキシドラジカル液晶微粒子の永久磁石による運動制御が可能であること、およびそれが分子間の強磁性的相互作用に起因することを示した。次に、磁場による分子配向制御について述べた。二つの液晶相について可変磁場中での偏光顕微鏡観察等を行い、磁場に対する分子の応答性について考察した。

第5章は実験項である。

学位番号	人博第 468 号	氏名	小 山 公 平
学位授与の日付	平成 21 年 3 月 23 日		
専攻・指導教官名	相関環境学専攻 三室 守		
論文題目	Characterization of the photosynthetic electron transfer chain of a cyanobacterium <i>Gloeobacter violaceus</i> PCC 7421 : Spectroscopic and biochemical studies (シアノバクテリア <i>Gloeobacter violaceus</i> PCC 7421 の光合成電子伝達系に関する分光学・生化学的研究)		
調査委員	〔主査〕 三室 守 〔副査〕 田村 類, 畑 安雄, 鹿内利治 (理)		

論文要旨

本論文では、シアノバクテリアにおけるふたつのエネルギー獲得代謝系である光合成系と酸素呼吸系の電子移動反応系での連関を、チラコイド膜を持たない特異な種、*Gloeobacter violaceus* PCC 7421 を用いて解析した。さらに、他のシアノバクテリアとの比較検討から、光合成系の構築に必須の要素、原則を考察し、以下の結論を得た。

(1) 光捕集タンパク質超複合体であるフィコビリソーム (以下 PBS) 中に 2 種の新規リンカータンパク質を発見し、それらを含む構成要素の化学量論に基づいて PBS の特異な形態モデルを構築した。その結果は、従来の電子顕微鏡観察を支持するものであると同時に、光捕集系の多様性を提示することとなった。

(2) *G. violaceus* の光化学系 II (PS II) の酸素発生機構の解析を *Synechocystis* sp. PCC 6803 との比較より検討した。酸素発生複合体の主要因子である Mn クラスターを安定化する表在性タンパク質の一次構造は *G. violaceus* において保存性が低く、その安定化能に欠陥があると予測されたが、酸素発生活性や Mn クラスターの S-state cycle の観測から *Synechocystis* と同等の反応を行うことが判明した。この結果より Mn クラスターを安定化するタンパク質の高次構造には多型性があるという、従来の考えを大きく変える結論に達した。

(3) 一方、*G. violaceus* の PS II の電子受容側においてプラストキノンの再酸化過程が電子移動の律速となることを明らかにした。呼吸活性が高いことから、呼吸系と光合成系との間で電子移動の競合が起こることが原因であると考えられた。このことが、*G. violaceus* の特異性の本質であることが判明した。

以上の結果から、光合成電子伝達系では、エネルギー供給源となる酸素発生反応では多型を容認しながらも保存性を確保すること、一方、電子受容反応では反応の許容範囲が広いという電子伝達系の構築の原則が明らかとなった。

学 位 番 号	人博第 469 号	氏 名	しま だ みき お 島 田 幹 男
学位授与の日付	平成 21 年 3 月 23 日		
専攻・指導教官名	相関環境学専攻 小松 賢 志		
論 文 題 目	Inactivation of the Nijmegen breakage syndrome gene NBS1 leads to excess centrosome duplication via the ATR/BRCA1 pathway (DNA 修復タンパク NBS1 の ATR/BRCA1 経路を介 した中心体複製機構の解析)		
調 査 委 員	〔主査〕小松 賢 志 〔副査〕五十嵐樹彦, 三浦 智行		

論文要旨

ナイミーヘン染色体不安定性症候群 (Nimehen breakage syndrome, NBS) はゲノム不安定性及び高発癌性といった症状を示す遺伝病である。原因遺伝子である NBS1 は DNA 二重鎖切断 (DNA double strand breaks, DSB) が生じた際, BRCA1, ATR といったタンパクと相互作用することで DSB の修復に関わることが知られている。今回我々は, NBS1 が細胞分裂に関わる細胞器官である中心体と共局在することを免疫染色法及び中心体の単離法を用いて見出した。ヒト U2OS 細胞及びマウス NIH3T3 細胞において siRNA による NBS1 のノックダウンを行った結果, 中心体の過剰複製が生じた。また, NBS1 のノックアウトマウス細胞では中心体の過剰複製が多く観察されたが, NBS1cDNA を導入し NBS1 の機能を相補することにより中心体の過剰複製の割合が減少することを確認した。また, これらの表現系は BRCA1 の機能を阻害した細胞でも観察されることが知られている。そこで我々は, BRCA1 のノックアウト細胞において siRNA によって NBS1 をノックダウンしたが, BRCA1 のノックアウト細胞からさらに付加的な中心体の過剰複製は観察されなかった。これらより BRCA1 と NBS1 は共通のシグナル伝達経路に属している可能性が示唆された。また, BRCA1 は中心体の構成タンパクである γ -tubulin をユビキチン化することが報告されている。ユビキチンを特異的に認識する抗体である FK2 を用いると BRCA1 の欠損細胞では中心体のユビキチン化が減少していた。NBS1 及び NBS1 のリン酸化に関与している可能性がある ATR のノックダウンでも同様に中心体のユビキチン化が減少している様子が観察された。以上より, NBS1/ATR/BRCA1 の DNA 修復機構が DNA の存在しない中心体においてその数の制御を行っている可能性が新たに示唆された。また, これらの結果は中心体制御依存的な細胞の癌化機構にも新しい知見を与えるものである。

学 位 番 号	人博第 470 号	氏 名	高 ^{たか} 橋 ^{はし} 禎 ^{よし} 憲 ^{のり}
学位授与の日付	平成 21 年 3 月 23 日		
専攻・指導教官名	相関環境学専攻 山口良平		
論 文 題 目	ヒドリドで架橋されたイリジウム二核錯体による有機小分子の活性化に関する研究		
調 査 委 員	〔主査〕山口良平 〔副査〕山本行男, 田村 類, 藤田健一		

論文要旨

近年の有機金属化学の目覚ましい発展により、多くの遷移金属錯体触媒が有機合成において広く利用されるようになり、それにともない単核錯体の化学に対する理解は広さと共に深さを増し、今なお発展を続けている。一方、二つ以上の遷移金属中心を有する多核錯体や多核金属クラスターは単核錯体に比べ、金属原子同士の近接効果により特異な反応性を示すことが期待され注目されている。しかしながら、その研究例は単核錯体に比べれば少なく、多核錯体の化学を明らかにしていくことは有機金属化学における重要な課題の一つである。そこで、ヒドリドで架橋されたイリジウム二核錯体を各種合成するとともに、これを用いた有機小分子の活性化を検討した。第二章では、ジホスフィンとヒドリドで架橋されたイリジウム二核錯体からヒドリド配位子を引き抜くことで 32 電子高活性種を発生、捕捉するとともに、これを用いることで温和な条件下で速やかに分子間 C-H 活性化が進行することを明らかにした。第三章では、ヒドリドのみで架橋されたイリジウム (II) 二核錯体にリン、硫黄などのヘテロ元素配位子が配位することで、金属間での電子移動が誘発されることにより進行する協働的な C-H 活性化を見出した。第四章では、ジフェニル-2-ピリジルホスフィンとヒドリドで架橋された非対称なイリジウム二核錯体及びヘテロ二核錯体を合成し、異なる環境下にある金属を架橋したヒドリド錯体へのアルキン挿入反応における位置選択性、および、生成した架橋ビニル配位子の挙動について述べている。今回見出した二核錯体による C-H 活性化反応及びアルキンの挿入反応は、いずれも架橋ヒドリドが構築する近接したイリジウム二核中心が提供する反応場によるものであり、ヒドリドで架橋されたイリジウム二核錯体の有機小分子に対する反応性を検討し考察することにより、二核錯体の協働作用を明らかにしたものと考えられる。

学位番号	人博第 471 号	氏名	深 ^{ふか} 澤 ^{ざわ} 嘉 ^{よし} 伯 ^{のり}
学位授与の日付	平成 21 年 3 月 23 日		
専攻・指導教官名	相関環境学専攻 三浦智行		
論文題目	Virological and immunological analysis of systemic lymphoid tissues in the early phase of simian-human immunodeficiency virus infection (サル/ヒト免疫不全ウイルス感染初期での全身リンパ系組織におけるウイルス学および免疫学的解析)		
調査委員	〔主査〕三浦智行 〔副査〕五十嵐樹彦, 小松賢志		

論文要旨

HIV 感染に有効なワクチンを開発するためには、予後に深く関係すると考えられている HIV 感染初期におけるウイルス増殖機序および、病態進行を防御する有効な免疫機構を解明する必要がある。感染初期における深部組織の検索はヒトでは不可能であり、現在までのエイズ研究において有効なワクチン効果を示すものは、安全性に問題がある弱毒生ワクチンだけであることから、本研究ではサルに感染・発症するサル免疫不全ウイルス (SIV) と HIV-1 のキメラウイルス (SHIV) を用いて、感染初期における全身リンパ系組織を解析し、感染動態、免疫細胞動態および弱毒生ワクチンによるウイルス増殖抑制機構の解明を目的とした。

強毒または弱毒 SHIV 株をそれぞれアカゲザルに経直腸接種し、接種 1, 2, 4 週後に剖検を行い各種リンパ系組織中のウイルス増殖、ウイルス主標的細胞である CD4⁺T 細胞の減少を比較解析した。また、弱毒生ワクチン株をアカゲザルに免疫し、その 1 ヶ月後に強毒株を経直腸攻撃接種したサルの解析を同様に行い、前述の強毒株接種の結果と比較した。

その結果、サルに急激なエイズ死をもたらす強毒株と比べて弱毒株は粘膜感染初期に全身臓器への拡散が遅く、腸、腸間膜リンパ節、胸腺と段階的に増殖のピークを示し、感染 4 週以内に小腸の CD4⁺T 細胞だけを減少させたことから、HIV の標的臓器として小腸の脆弱性が明らかとなった。一方、生ワクチン接種ザルでは非免疫ザルと比較して、攻撃接種 2 週後に見られるウイルス増殖のピークが有意に低く抑えられ、末梢血のみならず全身組織でのウイルス増殖を著減させていた。さらに、これらサル群では、腸管に多く含まれるメモリー CD4⁺T 細胞の急速な減少を全身組織で防御している事が明らかとなった。

以上の結果から、感染後早期からウイルス増殖を抑制し且つ、全身のメモリー CD4⁺T 細胞の減少を防ぎ、ウイルス感染に対して脆弱な腸管でもウイルス増殖・細胞傷害性を抑制出来る免疫を誘導することが有効なワクチンに重要であると考えられる。

学 位 番 号	論人博第 27 号	氏 名	棚瀬 慈 郎
学位授与の日付	平成 20 年 9 月 24 日		
専攻・指導教官名	共生文明学専攻 田中雅一		
論 文 題 目	インドヒマラヤのチベット系諸社会における婚姻と家運営——ラホール、スピティ、ラダック、ザンスカールの比較とその変化		
調 査 委 員	〔主査〕田中雅一 〔副査〕菅原和孝、足立 明 (アジア・アフリカ地域研究研究科)		
専 門 委 員	高山龍三(元京都文教大学教授)		

論文要旨

本論は、インドヒマラヤ西部に展開するチベット系諸社会についての比較研究を試みたものである。対象となっている地域は、インド共和国のヒマーチャル・プラデーシュ州ラホール溪谷、同州スピティ溪谷、ジャンムー・カシミール州ラダック地方、同州ザンスカール地方である。

特に中心的なテーマとなっているのは、それらの社会における家運営のあり方と、婚姻の方策に関するものである。特に、それが近代国家の枠組みの中で、如何なる変化を蒙ってきたかを比較しつつ検討することを目的とする。

第 1 章では、論文の構成や、対象地域の歴史の概略、自然環境について簡単に触れる。

第 2 章では、チベットの家運営と婚姻に関する先行研究について検討する。特にチベット系民族のおこなう一妻多夫婚の問題は、文化人類学における中心的なテーマのひとつであった。一妻多夫婚に関する議論をたどり、その通文化的研究の是非、環境との関連、家の運営に関して一妻多夫婚という婚姻の形がもっている意味について検討する。また従来の研究でもっぱら用いられてきた世帯 (household) という概念が必ずしも適切ではないことを論じ、代わりに清水昭俊の定義する「家」の概念の使用を提唱する。

第 3 章では、ヒマーチャル・プラデーシュ州ラホール溪谷の事例を検討する。ラホールは北インドの平野部にも比較的近く、外界との交流も密であり、経済的にも豊かな地域である。その一方でチベットの「骨と肉」の観念 (父親の「骨」はその子供の「骨」として引き継がれ、母親の「骨」は、子供の「肉」となる) を依然として強く維持し、一妻多夫婚もさかんにおこなわれてきた。

一妻多夫婚は、兄弟間の連帯性と「家」の融和を象徴する婚姻の形式と考えられている。一方財産の継承に関しては、父-息子の関係が重要な意味をもち、一妻多夫婚に参加しない男性は、財産分与を要求することができる。ラホール社会においては、この集合志向と個人志向の問題は時に解決の困難なジレンマを引起す。その例を婚姻と婿取り (マクパ) の事例を取り上げて検討する。またそれに関連して、ジェンダーの問題について考察する。

こうした社会構造の矛盾は、しかしラホール社会のもつ外向性にもつながっている。ラホールで 1960 年代初期に発生した一種のユートピア運動は、この外向性の発現の一つの例として考えることができる。

第 4 章では、ラホールの西側のスピティにおける事例を検討する。スピティでは全域でチベット語方言が用いられ、ヒンドゥー文化の影響はラホールに比してより希薄である。しかしピン溪谷を除いては、一妻多夫婚はおこなわれない。通常家を引き継ぐのは長男のみで、二男以下は出家するか、さもなくばマクパ (入り婿) として他家に入る。両親は家督を長男に譲ったあとは、しばしばカンチュンと呼ばれ

る隠居家を形成する。

スピティにおける家運営の方策は、ラホールに比して矛盾の少ないものではあるが、それはスピティの人々の自足性にもつながっている。

第5章では、ジャンムー・カシミール州のラダックとザンスカールにおける事例を検討する。ジャンムー・カシミール州では1941年に一妻多夫婚は法的に禁止されるなど、ヒマーチャル・プラデーシュ州とは異なった社会的環境に置かれてきた。

ラダックやザンスカールでは、かつては一妻多夫婚を伴った家運営のシステムをとってきたと考えられるが、現在一妻多夫婚をおこなうことは少なくなっている。またチベットの「骨と肉」の観念も忘却されつつある。さらには、相続に関して息子がありながら娘にも分家の形成を許すなど、チベットの慣行からは逸脱する傾向が見られる。

第6章では、チベット、特にツェン地方における領民支配と家運営に関する報告を検討した上で、それをインドヒマラヤにおける事例と比較する。共通点としては、1) 生得的な社会身分をとまなっていること。2) 平民の中でも経済的な差異による区分が存在すること。3) 領主もしくは僧院に対する相当重い貢納の義務を有していたこと。4) 貢納の義務を果たすためにも家の分割の回避が重要であったことが挙げられる。

こうした共通点をもちながらも、インドヒマラヤのチベット系諸社会は、財産の相続法や隠居慣行の有無、一妻多夫婚の慣行の有無に関して違いをもっている。そのことは、現代的な状況に対して、各社会がとってきた異なった適応の仕方にも現れている。

最後に、以下のような点に関して、インドヒマラヤのチベット系諸社会における変化が論じられる。

- 1) 「骨と肉」の観念の忘却：チベット社会には「骨と肉」の観念が広く存在し、特に同一の「骨」をもつ者の結婚、性関係はインセストとして忌避されてきた。しかし現在スピティやラダックでは「骨と肉」の観念は忘却されてしまったか、されつつある。一方ラホールにおいては明瞭に意識されている。
- 2) 一妻多夫婚の問題：ラホールでは現在も4割ほどの世帯でおこなわれているが、特に若者の間では少なく、将来的には減少してゆくことが予想される。スピティではもともと一妻多夫婚をおこなわず、ザンスカールやラダックでもその実践の頻度は減少してきたと考えられる。
- 3) **mono-marital** な原則の変化：かつての封建的体制化では、重い貢納の義務を果たすためにも、家の中の1世代には1組の夫婦関係に限定しようとする志向が強かった。しかし現在はそういった経済的圧力は存在せず、実質的に **mono-marital** な原則に対する必要性は減少している。ただしラホールでは、家の経済的上昇を志向する傾向が強く、一種の企業化精神ゆえに家の分裂が抑えられてきたと思われる。
- 4) 父系出自原理の重要性の低下：チベットは父系出自性の優先する社会であったと考えられる。例えば、主要な家産は男性メンバーにのみ引き継がれ、ファスラなど、父系を通じて継承される神を祀ってきた。しかし、特にジャンムー・カシミール州ではこうした父系出自の優勢に反するような事例が見られる。
- 5) カンチェンとカンチュンの変化：カンチュンは、元来家督を息子夫婦に譲った両親が隠居のために形成する場合が多かった。現在もザンスカールにおいては殆どの家で隠居家としてのカンチュンを形成している。しかし、特にラダック近郊では隠居家としてのカンチュンを形成せず、家長は終生カンチュンに留まる場合が多い。また、ラダック、ザンスカールではカンチュンに娘、息子が住んで、そのまま分家を形成するケースが多い。

このように、ジャンムー・カシミール州のチベット系社会において変化が大きく、父系出自原理の重要性の低下、「骨と肉」の観念の忘却、一妻多夫婚の現象が、ほぼ平行して進んでいるのに対して、ヒマーチャル・プラデーシュのチベット系社会では、**mono-marital** な原則が依然として強く意識されていることが分かる。

学 位 番 号	論人博第 28 号	氏 名	林 ^{はやし} 紀代美 ^{きよみ}
学位授与の日付	平成 21 年 1 月 23 日		
専攻・指導教官名	文化・地域環境学専攻 山田 誠		
論 文 題 目	日本の水産物流通に関する地域形成論的研究 ——消費や発展基盤の変化に即した地位の確立に注 目して——		
調 査 委 員	〔主査〕山田 誠 〔副査〕浅野耕太, 江田憲治, 金坂清則, 小方 登		
専 門 委 員	小野征一郎 (近畿大学)		

論文要旨

本研究は、消費や発展基盤の変化に即した関係主体・地域の流通上の地位形成や価値創出に注目し、多様な水産製品を取り上げて、水産物の流通構造や関係者の活動を分析することを目的とした。

〈序論〉高度経済成長以降の日本の水産物流通の特徴と課題を概観し、先行研究の動向を確認した。それを踏まえて本研究では、関係主体が流通上の役割や活動方法を刷新し、流通上の位置づけ・機能を確立する試みや、自地域・商品の新たな価値を創出する取り組みを考察することとした。その際、生産から消費までを通して流通構造を考察し、品質等の特徴や差異、需要者側の態度や要望、関係者間での情報交換が諸活動や流通展開の選択・評価に与える影響に留意することとした。

〈第 1 部〉対日輸出に関わる海外生産地域に注目し、活動展開や貿易構造、生産地域の発生や移動、流通上の地位の確保などを考察した。その際、日本市場の動向が海外生産地域の活動に与える影響や、それらへの関係者の対応などにも注意した。あわせて、類似輸入品が存在する国産品について、その流通構造や、関係主体・地域による活動や品質の差別化への対応などを確認した。

〈第 2 部〉従前の研究で注目が乏しかった特徴を持つ漁港や商業港湾における流通構造を、集出荷活動に注目して考察した。そして、条件変化にともなう関係地域での活動再編や流通上の地位の確保、機能特性に応じた流通展開を明らかにした。事例として、下関漁港（本港・分港）と下関商港を取り上げた。あわせて、取扱商品の内容や関係国から輸入・陸揚地点の類型化や分布傾向の考察をした。

〈第 3 部〉「食」に関わる学びの活用や接点の創出の工夫に注目しながら、水産業・水産物に対する人々の理解の向上や、需要者側の反応や評価を受けての供給者側の活動の改善、地域資源の活用に関わる活動の可能性と課題について考察した。あわせて、水産物消費の平均化の進行と地域差の残存の程度を分析、確認した。

〈結論〉以上の結果を総括し、より望ましい流通を実現する上で重要な視点や活動をまとめた。

学 位 番 号	論人博第 29 号	氏 名	あら き とし ゆき 荒 木 俊 之
学位授与の日付	平成 21 年 3 月 23 日		
専攻・指導教官名	文化・地域環境学専攻 山田 誠		
論 文 題 目	現代日本における小売商業の立地変化に関する研究 —— 立地規制の影響を中心として ——		
調 査 委 員	〔主査〕山田 誠 〔副査〕金坂清則, 伊従 勉, 西垣安比古, 小方 登		

論文要旨

本研究では、1970年代後半以降の現代日本における小売商業の立地変化を、立地規制の影響を踏まえながら明らかにするために、1) 立地規制の変化にともなう大型店の立地変化とその影響、2) 開発許可条例の制定にともなう小売商業の立地への影響、3) 立地規制の強化にともなう開発されたコンビニエンスストア（コンビニ）の立地変化の3つの課題に取り組んだ。

まず1) では、まちづくり3法の成立とそれ以後の都市計画制度の充実による大型店の立地の規制・誘導について検討した。これらは、小売商業、特に大型店の立地に対する規制と誘導に期待が持たれていたが、その効果を発揮することなく、2006年に再び都市計画法が改正されることとなった。また、この改正が大型店の立地に与える影響を検討するために、岡山市と高松市を事例として取り上げた。両市におけるこれまでの大型店の立地動向を踏まえると、前者でその影響は大きくはなく、後者では大きいと考えられる。

次に2) では、岡山県内を事例として取り上げ、同じ都市計画区域でありながら、制定主体が異なる場合、小売商業の立地に及ぼす影響に相違が生じることが明らかになった。また、事例として取り上げた倉敷市の郊外へ延びる幹線道路のロードサイドでは、ロードサイド型商業地が形成されており、その形成とその後の変容が開発許可条例における例外区域の制定を促したと考えられる。

最後に3) では、都道府県スケールの視点からは、都市の人口規模に基づく階層効果と中心都市から周辺へと広がる隣接効果の双方によって説明できることを明らかにした。また、中心都市スケールでは、3都市の事例から、ロードサイドへの立地指向、立地地点の多様化、1990年代後半以降の都市中心部における集中的な分布が共通点として認められる。3都市はコンビニの出店時期は異なるものの、1980年代、90年代、90年代後半といった年代ごとにおける立地展開の傾向や変化の時期は、ほぼ同様であったといえる。